
王弟殿下の想い人

木下 唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王弟殿下の想い人

【Nコード】

N7291P

【作者名】

木下 唄

【あらすじ】

記憶をなくした少女ユーリは、言葉さえもわからず、不安な気持ちのままとある村で保護されていた。そこへ王都からやって来た騎士アーケルフが彼女を迎えに来て……。

王都の魔法局で騒がれている“魔力のひずみ”の原因はユーリなのか。ユーリを狙う得体の知れない刺客は何者なのか。陰謀に巻き込まれる少女と、そんな少女を守る王弟殿下の恋のお話。甘々溺愛路線を目指すつもりです。お暇潰しに読んで頂ければ嬉しいです。

プロローグ

目覚めたら、自分が誰なのか、一体どこにいるかわからなかった。辺りを見渡すとそこはうっそうと茂る森だった。木々の合間からかろうじて青空が見える。

私は森の中を当てもなくさまざつた。

最初に出会った相手が悪かった。取り囲まれて押さえつけられて抵抗したら殴られた。

人相の悪いその男たちは、どうやら追剥のようだった。通りかかる人を襲って生計をたてているのだろう。

殴られた痛みよりも私を恐怖へ追い込んだのは、相手が何を話しているか自分には解らないことだった。自分は一体どこに迷いこんだんだろう。そしてどこへ帰ればよいのだろう。

私が女だとわかると、男達は別の意味で襲い掛かってきた。本能的な恐怖を感じ、私は暴れた。そしたらまた殴られた。

一瞬抗う気力が失せたが、その後で無性に腹が立った。

殴られても殴られても抵抗していたら、がむしゃらに伸ばした手の先に何かが触れた。硬い金属の感触だった。

私の上のし掛かっていた男は、気も早く腰のベルトをすっかり外していたから、そのベルトに付随した彼の武器が私の手の届く範囲に転がっていたのだ。思わずその塊を握り締める。そして夢中で振り上げた。私は完全に怒っていた。

そしたら、その武器が火を吹いた。

比喩表現ではなく、本当に火を吹いたのだ。

握り締めた鉄塊は、火の形をとった剣になり、私の意志通りに伸びたり縮んだりして男達を攻め立てた。

後で聞いたら、その武器は「魔法具」というものの類らしい。

「魔法」を使える素質のある「魔法士」や「魔法剣士」しか使えない武器で、各々に見合った「魔力」を武器に込めて具現化するらしい。私には魔法具を使える素質があったようだ。ただ、自分が誰なのかという記憶すら覚束ない私なりに「こんなものは初めて見る」と思った。もしかしたらそれまで魔法具を見たことが無かったのかもしれない。

手にした熱量を伴う凶器で、無礼な男達を懲らしめた。

気が立っていたのでひどいやり方だったかもしれないが、後悔なんてしていない。

私はただ自分を守っただけ。女を殴るような輩が多少火傷をしたからって問題はあるまい。

本当はもつと痛めつけてやりたかったが、弱った体ではそこまで至らなかった。

逃げた男達が残っていたベルトやズボンから、使えそうなものは粗方頂戴した。もちろん魔法具もだ。

手に入れた通貨は私が見たことも無い形をしていたが、一番必要なものだと思った。

その後も痛む体を引きずって、森を当て所なく歩いた。

体が痛かった。

水が欲しかった。

誰かに助けて欲しかった。

何よりも、一人世界から取り残されたような恐怖から私を救って欲しかった。

心細い夜を一人で過ごし、朝が来たのでまた歩き出した。しばらく必死に歩いていたら、小さな村にたどり着いた。

私は助かった。

親切な村の長が振舞ってくれた食事は、これまで食べた何よりも美味しかったに違いない。

記憶が無いから比較はできないけれど。

言葉もわからない年端もいかない傷ついた娘だと思われて、村長夫婦に保護してもらった日々は安らかで好ましかった。

引退前は子供たちに読み書きを教えていたという村長夫人は、私に根気よく言葉を教えてくれた。

三ヶ月もたつと、話すのはともかく、聞くことは大分ましになっていた。生活しなければならなかったので必死だった。

そうして、村での生活にも慣れてきた頃、男は王都からやって来た。

プロローグ（後書き）

つたない小説ですが、楽しんで頂けるようがんばります。
誤字脱字などございましたら、教えて頂けると有難いです。

【01話】 騎士がやって来た

「この村に魔力のある娘がいるということだが、それは真か？」

村長ロツコは戸惑っていた。

彼よりひと回り大きな体躯の騎士が王都から村を訪れ、有無を言わせぬ威圧的な態度で彼と向かい合っているのだ。

彼の身にまとう甲冑は王都の騎士団のそれであり、左の胸当てには国章が描かれていた。猛々しく吼える獅子を囲むように咲く紫の萩の花がこの国の国章だ。濃い茶色の髪と鮮やかな青い目を持つ騎士の青年は見目も良く、恐らくその物腰から貴族階級の出身であろうと思われた。

三ヶ月程前、ロツコは記憶を無くした傷だらけの娘を保護した。

娘はかろうじて名前は覚えていたようだったが、ロツコや彼の妻マーナには正確に発音できない名前だった。

かろうじて聞き取れる音を取って、彼らは娘のことを「ユーリ」と呼んでいた。

ユーリの身元を確認し、親のいない子だったら引き取るつもりで、王都に届出をしたのが先日のことだ。

行方不明の娘を探している哀れな両親がいないか確認するためだったのだが、思わぬ輩を釣り上げてしまったようだ。こんなことになるなら、わずかな手がかりも提出しようと、娘の持っている魔力のことを書くのではなかった。

魔力自体は五人に一人は持っている珍しくもないものだが、如何せん力が弱い。

料理をするときに火をおこしたり、喉が渴いたら少量の水を出したりする程度のものだ。

稀に強大な魔力を持つものが現れるが、そういった天才は幼少の頃に王都の魔法学院に保護され魔法士になるべく養育されるはずだ。ユーリは年齢を覚えていなかったが十三歳にはなっているだろう。王都にいないということは魔法局にも魔法学院にも所属していないということであり、魔力もたかが知れているはず。

そう思って届出書類の特記事項に魔力のことを記載したのだが……騎士が出向いてくるとは想定外だった。

「はあ。記憶を無くした娘を保護しており、その子が魔力を持っていることは確かですが、たいした力ではありません」

実際、娘は魔力は使えても小さな炎を出す程度で、一般の魔力持ちと変わらないレベルの魔力しか持たない。

「だが、魔法局が娘を迎えにいけというのでな。これは決定事項らしい。して、その娘記憶が無いといったな。それは真か？」

「はい。三ヶ月前に保護した時には名前以外の全てを忘れておりました。暴漢に襲われたのか傷だらけで、無残な有様でした。彼女は言葉も話せずにはいたので、私の妻がこの三ヶ月言葉を教え込んでおりましたが……」

「言葉も話せなかったのか？ ……村長殿、娘は一度王都へ連れて行くことになる。魔力のあるものはもれなく王都に届出が必要になることは知っているな？ ……該当する娘の情報は魔法局の登録者リストに存在しなかった。故に確認と調査のため娘は一旦魔法局で預かることになるそうだ。して、娘はどこに？」

「魔法局ですか。……ユーリはこの村に帰ってこられるのでしょうか」

「それは私にはわからない。すまないな」

「……いえ。……妻と二人で娘のように思っていたものですから……。わかりました、こちらです」

ロッコは騎士を家の奥へと案内した。

日当たりの良い部屋で妻のマーナと娘は書き取りをしていた。

一生懸命文字を書いている娘、ユーリは短い黒髪と同じ色の瞳を持つ少女だった。肌は異国の貴重な調度品である象牙のような色合いで、滑らかな美しいものだった。言葉はまだカタコトながら、柔らかく澄んだ響きを持つ声音は、一見少年のように見える彼女の姿かたちに良く似合ったもので、歌でも歌えば素晴らしい歌手になるだろうと思わせた。

ロッコとマーナにすっかり懐いてくれたユーリを娘として引き取るかと考えていたのが、こんなことになるうとは……。

マーナがロッコの側に立つ騎士を見て、優雅に腰を折リスカートの裾を持って礼をした。

ユーリはまだ気づかず羽ペンを動かしている。

「随分と熱心だな」

騎士の言葉を受けて、ユーリは顔をこちらへ向け何度か瞬きをした。

白く立派な軽甲冑をまとった騎士は、この村では決して見かけることのない存在だ。

日頃目にする村の者とは明らかに違う異質な風体に、ユーリは驚

いたようだった。

「ユーリ、お客様ですよ。ご挨拶なさい」

マーナが言うと、ユーリは騎士を見つめたまま立ち上がり、マーナと同じ礼をした。

マーナの躰は細部にわたって行なわれているようだ。

「ユーリです。はじめまして」

「ほう、言葉が達者じゃないか」

「いえ、まだ、少しです」

騎士に挨拶をし、「少し」という手振りをすると、ユーリは戸惑ったようにロッコを伺い見た。

この娘に王都行きを話すのは気が重い。

王都はこんな小さな村とは違って善人ばかりが住む街ではないのだ。

言葉を習得中のユーリに良くしてくれる人がいると良いのだが……。

願わくばすぐに戻ってこられるよう祈りつつ、ロッコは切り出した。

「ユーリ、この方は王都からいらっしゃった騎士様だ。ユーリを迎えにきた。ユーリは魔力があるだろう。その申請を魔法局にしなければならんだよ。この国の決まりなんだ。わかるね？」

ユーリはロッコの言葉を噛み砕くように、少しずつ理解したよう

だった。そして、首をかしげて言った。

「ここへは、僕は、帰れますか？」

「私もマーナもそれを願っている。早く帰っておいで。いつまでも待っているよ」

ロッコがゆっくりと諭すように話すさまを、マーナは不安そうに、騎士は表情も無く見つめている。

マーナは折にふれてユーリを子供のように扱い、溺愛している気があるので、後でロッコはマーナに非難されるだろう。

だが、ロッコの目にはユーリは子供として映ってはいなかった。彼女には知性がある。

自分で考え、自分で行動し、自分で責任を取る力がある。

このときもユーリはひとつ頷くと、意思を持った瞳で騎士に向かい、改めて挨拶をした。

「ユーリです。よろしくおねがいします、きし様」

「ああ。私はアーケルフだ。こちらこそよろしく頼む、ユーリ」

翌日、騎士に連れられ娘は村を後にした。

【02話】 ユーリという少女

居心地の良い村だった。

ロッコは言葉数は少ないが親切で、マーナはまるで母親のように甲斐甲斐しく世話をしてくれた。

こちらの言葉を教える時は鬼教師にもなったが、マーナはとても優しく、ユーリにとって離れがたい存在になっていた。

あの日。

村にたどり着き、名前を聞かれた時、急に単語がひらめいた。

村上祐里子（むらかみ ゆりこ）

それが自分の名前だった。

どうやらこの言葉では発音しにくい名前のようにだったので、呼びやすいように呼んでもらうことにした。その結果、祐里子はユーリと呼ばれるようになった。

ユーリが村での生活に慣れ、マーナ曰く“脅威の速さ”で言葉を覚えていた頃、王都から騎士がやって来た。

王都で「魔力を使える」ことを申請しなければならぬと聞かされ、ユーリは納得した。

だが、ロッコの様子を見てみるとあまり楽しいことではなさそうだったので、警戒しつつ慎重に行動しようと思った。

そして、今に至る。

ぱちぱちと音をたてて焚き火の火が跳ねる。

夜も更けた静かな森の中、ユーリは王都の騎士と火を囲んでスープを飲んでいた。

初めてこの森を歩いた時の絶望に比べれば、暖かさも居心地のよさも格段に違う。

何より一人では無いことが少女を安心させていた。

「ユーリ、寒くはないか？」

騎士が心配そうに聞いてきたので、ユーリは営業スマイルで応えた。

「大丈夫。僕は、寒くありません」

「……ユーリ、少し前から気になっていたのだが、君は自分のことを“僕”というな。なぜだ？」

「変ですか？」

「いや。……驚きはしたが」

「“ああたし”は発音、難しいです。“僕”は発音、しやすいです。

ダメですか？」

「いや、ダメということはない」

騎士は少し慌てたように言って、微かに笑った。

「むしろ君のような華奢な娘が“僕”と言つと、少女なのか少年なのかわからない中性的な良さがあると思う」

騎士の言っていることの半分がわからなかったので、ユーリが首をかしげると

「君に合っている。良いと思う」

少し簡単な言葉に代えてくれたので、ニッコリ笑っておいた。

「ありがとうございます。きし様」

「アークルフでいい」

「あーくらぶ」

「アークルフだ」

「あーくりゅぶ」

「アークならば言えるか？ 私の名前の短縮語だ。アーク。言ってみる」

「あーく。……アーク？」

「そつだ。上手いぞ！」

嬉しそつに笑つた騎士、アークルフは何だか可愛かつた。笑うと思つたよりも若い。何歳くらいなんだろう、三十代くらいかなと思つていたけど違つのかもしれない。ユーリにしてみれば三十代はおじさんで、アークルフも立派にその対象だつた。何しろ、アークルフの初めの印象は厳つくてごつい戦士で、威圧感も威厳も村の人とは大分違つていた。けれど、今日一日を一緒に過ごしてみても、悪い人では無さそつだし、もう少し若いのかもしれないと感じていた。

濃い茶色の髪に印象的な鮮やかな青の瞳。白銀の甲冑の左胸の処には吼える動物の横顔と花の模様が描かれ、格好が良い。アークルフ本人も、結構良い男だ。

騎士が喜ぶので、ユーリはもう一度「アーク」と言つてにっこり笑つた。

少女の無害に見える笑みに微笑み返すと、アークルフはユーリの頭を撫でた。ちよつと強めに撫でられたので、ユーリは乱れた髪を手櫛で直した。ユーリの髪は直毛なので乱れるとぐしゃぐしゃになる。目の前の騎士や村の人々は多かれ少なかれ髪に巻きクセがついていて、整えやすそつに見え、ユーリは羨ましく思つた。

村で出会つた人々もアークルフも基本的に茶系の髪色で、ユーリと同じような黒髪は見たことがなかつた。

茶色にもいろいろあつて、アークルフやロツコのように濃い色の茶髪もいれば、マーナや村の女性達のように金髪に近い茶髪もいる。目の色は様々で、アークルフの青やロツコの緑、マーナの琥珀や村人の茶色など種類は豊富だつたが、黒はいなかつた。

珍しい髪と目の色だね、とは言われたが特に忌避されることも称

賛されることもなく普通に暮らせたので、たくさん人が行き交う場所へいけばそんなに珍しいものではないのかもしれない。むしろ珍しがられたのは髪の色ではなく長さだった。ユーリの髪は彼女が気づいた時から短かったが、マーナはすっかり追剥に襲われた時に髪を切られたと思い込んでいて、嘆いていたものだった。

どうやら女性は髪を長く伸ばすものらしい。未婚の女性は髪の上半分を結び上げ下半分は腰まで垂らすし、既婚の女性は髪を全て結い上げる。そういう決まりだ。この三ヶ月で伸びたとはいえ、ユーリの髪はまだ肩につくかつかないかという長さで、どちらかという少年の髪型らしい。ユーリは短い方が楽だったので特に気にしていなかったが、マーナに伸ばせといわれているので、このまま伸ばしてもいいかなと思っていた。

ユーリが一つあくびをすると、アーケルフが

「もう寝ろ。明日も早い」

と寢床を整えてくれた。ありがたい。

今日は本当に疲れる一日だった。村では机にかじりついて言葉の勉強をする他は屋内の手伝いばかりだったのに、今日は一日馬で移動などという急激な運動をしたので体が悲鳴をあげている。何よりお尻が痛い。

どうやら馬に乗るのは初めてだったユーリは、乗り方もわからなくて、アーケルフを少してこずらせた。けれど、アーケルフは存外丁寧に彼の前に乗せてくれたし、休憩も多くはさんでくれた。言葉数は少なかったがそれはロツコで慣れていたし、ユーリが話しかけたら易しい言葉で丁寧に応えてくれた。時折こちらを気づかっている気配も感じていた。こうして日も暮れて焚き火を囲む頃には、二人の間に少し打ち解けた空気が流れている。ユーリは自分の中の「

良い人リスト」の中にアークルフを加えても良いかな、と考えていた。

王都で何かあったらアークをすぐに頼れるように交渉してみよう。

アークルフが王都でどれくらい地位にいるのかもわからないし、魔法局というところかどんなところかもわからないので無駄骨かもしれない。けれど、ユーリはこっそりそう思った。まずは「言語習得中の記憶をなくした可哀想な少女」という路線でいこう。同情をひいて動きやすくなるかもしれない。それに、無くした記憶の断片を拾い集めるのは村よりも王都のほうが適しているだろう。情報が多いだろうという点で。

身の危険を感じたら腕輪に変形させたこの魔法具を使って逃げ出そう。

物騒なことを考えつつ少女は左手首にはめた腕輪をさすり、眠りについた。

無邪気（に見える）寝顔にアークが苦笑したのも知らずに……。

静かに夜は更けていく。

【02話】 ユーリという少女（後書き）

ユーリとアークが少し打ち解けたところで、次回に続きます。
誤字脱字などございましたら教えて頂けると有難いです。

【03話】 謎の刺客

変わった娘だ。アークルフはそう思った。

記憶を無くしていることも言葉が話せないということも現地に行ってから知りえた情報だった。だがそれを踏まえてもこの娘は少し変わっている。

あどけなさの残る無垢な表情を見せたかと思うと、油断ならない目つきで周囲を伺っていることもある。王都へ連れて行くと告げた時も、不安げに村長夫婦に泣きつくかと思いきや、瞬時に思考を切り替え「是」と応えた。かと思うと、馬に触れるのが初めての幼児のように、馬のいななきを怖がり、馬の背の高さに怯える様を見せた。必死になってこちらにしがみついてくる様子は可愛らしく、抱きながら宥めるのは楽しいものだった。

王都を出る前に「娘」と言われていなければ、初対面で少年だと勘違いしたかもしれないユーリの肢体は存外やわらかく、抱きしめた体は成長期の娘のものだった。村長は十三歳前後だろうと言っていたが、……十五歳にはなっているだろうと思う。

焚き火に照らされた寝顔は無垢な少女そのものだ。

髪の毛の長さは確かに短い、王都の魔法局や魔法学院へ行けば髪の毛の短い女もいる。

女性騎士でさえ長い髪を邪魔にならないよう結い上げているというのに、魔法士や魔法剣士の女性達は先進的なものの考え方をしているらしい。曰く「実験に邪魔だし」、「なぜ女は髪を長くしてないといけないの？」文句があるなら論文にまとめて」、「じゃあ男

も全員髪を長く伸ばしたら？ そしたら考えてもいい」などなどだ。

俺は似合っているなら何でもいいと思うが……女はいろいろと面倒くさいものだな。

王都へはあと二日もあれば到着できるだろう。娘が馬に乗りなれていないため、ゆっくり走らせてはいるがさほどの距離ではない。まずは魔法局へ行かねばならない。アーケルフは、彼を使い走りにした幼馴染の顔を思い出し顔をしかめた。

眠っている娘は無垢そのもので、起きているときよりも更に子供に見える。

この娘が魔力のひずみの原因かもしれない……か。ありえない話だな。

ただの無力な少女にしか見えない。記憶も言葉も無くした哀れな少女だ。

一旦魔法局で申請さえ済んでしまえば、また村へ送り届けてやろう。村長夫婦も娘もそれを望んでいるだろう。

アーケルフが考えをまとめ、自らも休息を取ろうと身を横にしたその時だった。

矢が風を切り、アーケルフの頭上と焚き火を越えて、対面にそびえる木に深々と突きささった。

「！！」

アークルフはすぐに身を伏せた。剣を取り、辺りを伺いながら、寝ている少女のもとへ近寄る。刺客だ。こんな時に！ とにかく娘を守らなければ。

「おい」

“起きろ”と呼びかけようとして、驚いた。

「だれ？」

娘の目は開いていた。

辺りを伺うように目だけがきよろきよろと動いている。

「俺だ、アークだ。俺達は狙われている。この場から離れるぞ、ユーリ」

「黒い人間。……五、六人いる」

夜目には慣れているはずのアークルフでさえ、強い焚き火の明るさに邪魔されて相手を伺い知ることができずにいるのに、娘、ユーリは暗闇に六人の刺客がいるという。

「行くぞ！」

起き抜けで混乱しているのだろう、そう考え、アークルフはユーリをかかえて暗い森の中へ走った。

明るいつまらぬところにもいつまでも留まっていると危険だ。狙い撃ちにされる。

娘を抱え光の届かない暗い方へ暗い方へ走る。この辺りは王都直轄地で、子供の頃によく遊んだ森だ。

一体誰からの刺客かわらないが、地の利はアークルフにあるように思えた。

だが、大分離れながらも相手もしつかりとついてきているようだ。一つ舌打ちすると、アークルフは大木の根元の空洞に娘を隠した。ここならば娘の姿がすっぽりと隠れる。容易には見つからないだろう。

「ここから動くな。かがんで小さくなっているんだ、いいな？」

言い残すと、アークルフは元来た道をかけ戻った。

今度は誰からの刺客なのか。アークルフは証拠を探るために一人を残し、後は一掃するつもりでいた。脳裏に浮かぶ王宮の狐と狸の顔。あいつらのどちらか、もしくはそれに連なる誰かの仕業か……。

闇に目を慣らしながら、しばらく走ると、殺気が全身に降ってきた。

剣を抜き、飛び掛ってきた影に切りつける。手ごたえは感じたが致命傷ではない。矢が頬を掠めたので、次に飛び掛ってきた影の胸倉を掴み、盾にする。次なる矢が数本影の背中を射た。次の瞬間、屈んで、落ちた敵方の剣を拾い、矢が飛んできた方向へ投げつけた。くぐもった声と共に弓を射た者が倒れる音がした。間髪いれずに影が次々と襲い掛かってくる。アークルフは冷静に攻撃をかわし、一人ずつ順々に止めをさした。

地面に叩きつけられるように最後の影が崩れ落ちると、空気を冷えさせた殺気は消え、辺りにはアークルフの呼吸と血の匂いだけが

残った。

これで終わりか……？

辺りを見回しても人の気配は無い。足元に転がっている死体は四体。少し離れたところに矢を放った者の死体が一体。

しばらくそのまま周囲を見回したが、木々のざわめきしか聞こえてこなかった。そうしている間にもアーケルフが切り捨てた人間の体液の匂いが生臭く立ち上ってくる。

「……」

アーケルフは踵を返し、ユーリのもとへ戻ろうと歩き出した。

その時。

真っ赤な炎がアーケルフの背中を襲った。

「ぐあっ！」

咄嗟に身をよじったものの、左肩を焼かれ、アーケルフはうずくまいった。

振り返ると、人の頭ほどの大きさの火の玉を左右二つの手に浮かべた魔法士が木の陰から姿を現し、こちらを見て笑っている。

魔力で気配を隠していたか……。

アーケルフは焼かれた左肩をかばいながら、木の陰へ逃げた。

しかし、魔法士は標的を狙いやすい位置に体を転移させ、再度火の玉を投げつけてきた。

一つ目はかわしたが、二つ目の火の塊は避けようが無く、アークルフを焼き尽くさんと目の前へ迫ってくる。

アークルフは今度こそ全身を焼かれることを覚悟した。

「だめー!!!」

甲高い悲鳴と共に雷が魔法士とアークルフの間に落ちる。

アークルフを襲った火の玉は彼の目の前で霧散した。

魔法士は飛びのき、落ちた雷から逃げるように距離をとった。

ぼつり、雫が頬を濡らしたと思うと、唐突に豪雨へと変わった。

警戒する魔法士とアークルフの前に暗闇から姿を現したのは、雨に打たれた少女だった。

少女は俯き、彼女の表情は見えない。雨に全身を濡らした姿は静である故にいつそ不気味でもあった。

ユーリ!

「お前が……。炎よ!!!」

瞬時の差で魔法士の方が速く動いた。

魔法士の繰り出す炎がユーリを襲う。

「やめるー!!!」

アークルフは叫び、娘をかばおうと走り出したが、間に合わない。

ユーリは左手首を押さえ俯きながらぶつぶつと何かを呟いており、逃げる気配を見せない。

「ユーリ!!!」

アークルフは叫んだ。

魔法士の手から離れた炎は娘に近づくにつれ巨大になり、その体を飲み込むかに思えた。

しかし、巨大な火の塊は娘に届く直前に霧散した。

「……」

魔法士は呆然としている。彼の目の前で、自身が作り出した炎が消えうせてしまったのだ。

一体何が起きたのか把握できていないのだろう。それはアークルフも同じこと。

「えい！」

唐突に、ユーリが叫んだ。この場にそぐわない可愛らしい掛け声だ。

すると、滝のように降り注いでいた雨が、意思を持ったように一塊になり、ついには水の集合体となった。大きな水の塊はユーリの頭上で轟音と共に膨れ上がり、ついには竜の形へと変化した。周囲の木々より高く聳える巨大な水竜が、地鳴りを響かせ、ユーリの背後にそびえ立つ。威嚇するような竜の嘶きは、その場の空気を切り裂き、ビリリと鼓膜を振動させた。

これは何だ……！？

アークルフも魔法士も呆気に取られて、雨水で作られた巨大な竜を見上げた。

すると、一瞬の後に、竜はすさまじい速さで魔法士の鳩尾に頭から突っ込んだ。

「ぐあっ！」

驚愕に目を見開いた魔法士が弾き飛ばされる。

「えい！」

再びユーリが叫ぶ。右手を伸ばし、攻撃対象を特定するように魔法士を指差している。

竜はユーリの掛け声を合図に、猛々しいその尾で魔法士を弾き飛ばした。

最初の一撃で魔法士は気を失っていたようだった。その体は呆気なく跳ね上がる。

「えい！！」

止めとばかりにユーリが叫ぶ。

竜の尾が魔法士めがけて振り落とされ、魔法士は尾と地面との間に押さえつけられた。

爆音と共に地面を削るその様子は、尾の力の凄まじさを物語っている。

グアアアアアアア！！

獲物を捕獲したことを宣言するように、水竜はつなり声をあげ、再び空気を震えさせた。

「……………」

アークルフはその様子を言葉も無く見守っていたが、はっと気づいてユーリのもとへ駆け寄った。

少女は水竜に怯えることもなく、冷静に立っていた。降り続く雨に全身びしょ濡れだ。

「ユーリ、大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

「怪我はないか？」

「僕は、けがありません。……アーク、怪我あります」

そう言うと、ユーリはアークルフの左肩を見て顔をしかめた。

「痛い？」

「ああ、大丈夫だ。それよりも……」

一体あれは何だったのだ。いや、何なのだ。雨で作られた水竜は未だ二人の目の前で魔法士を尾で押さえつけている。透明で色の無いその竜は、その巨体の向こう側をゆらゆらと透けさせながら、悠然とそこに存在していた。その瞳はこちらを見据え、主であるユーリの次の指示を待っている。

「ユーリ、あいつは何だ？お前が出したのか？」

竜の視線を感じながら、アークルフは少女に尋ねた。

「……そうです」

ユーリは少し気まずそうな顔をした。
もしかしたら自身の強大な魔力の存在を秘するつもりだったのだ
ろうか。

アークルフは少女の塗れた頬に触れた。
これだけのことをしておきながら、少女の顔に怯えの色は一切見
えない。

「ユーリ、……あいつは死んだのか？」

アークルフが尾に押さえつけられている魔法士を顎で示すと、ユ
ーリは首を振った。

「いいえ、死んではいません。でも、たくさん、水を飲みました。
このままだと、えーと……死ぬかも？」

文法の正否を問うように首をかしげながらこちらを伺ってくる少
女に、アークルフは苦笑を返した。この娘は存外強い肝を持っている
らしい。

「では、あの魔法士を一旦解放してくれ。誰の企てか吐かせるため
にもあいつは王都へ連れて行く」

「わかりました。……えい！」

ユーリの掛け声と共に一瞬で水竜は形を失い、竜を形作っていた
大量の雨水が勢い良く魔法士と地面を叩いた。竜が発していた威圧
が消えうせると、えぐれた地面と仰向けに倒れた魔法士だけが残っ

た。

「……まずは水を吐かせるか」

アーケルフは頭を振って気持ちを切り替えた。水しぶきが顔にかかる。

とてつもない魔力の追求は王都に着いてからでもいい。どうやらユーリは普通の娘ではないようだ。

じゃかじゃかとぬかるんだ土の上を大股で歩いて、アーケルフは魔法士の胸倉をつかんだ。ぐったりとしている。水竜にいたぶられ、大分水を飲んだらしい。魔法士の胸を何度か押すと彼は水を吐き出し、身じろぎしながら目を開けた。

「お前を拘束させてもらう。一緒に王都リグゼンドラへ行ってもら
うぞ」

アーケルフが男の拘束して言うと、魔法士はニヤリと笑った直後に苦しみだした。

「おい!!」

「ぐあーっ!!」

叫びと引きつるような呼吸。

押さえつけたアーケルフの体から逃れるように痙攣が始まり、男の顔色はみるみる紫色へ変わった。

「くそっ、自害用の毒か!!」

アークルフは男の体を引き起こし、吐き出させようと鳩尾を突いた。

が、その甲斐もなく、

「かはっ！」

最後の一息を吐き出すと、男は白目をむき、やがて動きを止めた。

「くそっ！」

アークルフは男の体を地面に叩き付けた。

その様子をユーリは顔面蒼白になりながら見守っている。

「大丈夫か？」

アークルフがユーリを支えるように肩に手を回した途端、

「！」

ユーリは気を失い、アークルフは慌てて崩れ落ちる少女の体を支えた。

【03話】 謎の刺客（後書き）

動きのあるシーンは表現が難しいですね……伝わることを願っています。

【04話】 雨の匂いと少女の熱と

雨が降り続けている。

深夜の森は冷気に包まれ、濡れた体から体温を奪っていく。

アークルフは少女の体を抱え、暖めていた。

濡れた衣服を極力剥ぎ、素肌に近い格好でお互いを暖めあっている。

少女の意識は無い。

少女が気を失った後、アークルフは一旦焚き火の跡　雨です
っかり鎮火していたが　まで戻り、荷物と馬を確保すると、手
近な洞穴に避難した。少女が生み出した水竜が消えた後も雨はまだ
降り続いており、少女の体を暖める必要があつた。

洞穴の中で火を焚きなおし、幸い皮袋に入れていたため濡れてい
なかつた代えの衣服を素肌の少女の肩にかけた。

「っ……はっ……っ」

アークルフの腕の中で少女、ユーリは苦しげに荒い息を吐いてい
る。

本格的に発熱してきたようだ。

艶やかな黒の濡れ髪に乾いた布押し付け、水分を取っていく。

少女の目蓋は閉ざされ、髪と同色の長いまつげが火を受けて頬に

濃い影を作った。少女が苦しむ度にその影も揺れていた。

アークルフ自身も甲冑と濡れた衣服を脱ぎ、裸の上半身の上に少女を乗せて体温を与えようとしていた。

「ユーリ、もう大丈夫だ」

苦しむ少女を安心させようと声をかけるが、少女は嫌々と首を振り、何度も荒い呼吸を繰り返す。

『いやだ……こわい！』

「！」

少女が怯えた様子で発した悲鳴に、アークルフははっとさせられた。

何だ、今は。……魔法士が詠唱に使う呪語か？

アークルフ自身は魔力が無く、興味も無かったため、呪語には疎かった。

が、幼馴染の中には魔術の権威もあり、呪語は何度も聞いたことがある。

そもそも戦闘中は魔法師や魔法剣士と共に戦うこともあるので、呪語自体は耳に何度も入っているのだ。

だが今のは俺が聞いたことのある呪語とは響きが違ったようだ……。

『いや！……はなして、こわい！』

アークルフの腕から逃れるように少女は大きく身じろいだ。
一緒に発せられた言葉は、やはり今まで聞いたどんな呪語とも違
った響きに聞こえた。

「大丈夫。ユーリ、大丈夫だ」

安心させるように、宥めるように、優しく少女を抱きしめ囁く。
彼女が落ち着くまで何度もそれを繰り返した。

少女の呼吸が安定し少し落ち着いたかのように見えた頃、目蓋が
開き、大きな黒い瞳が涙をたたえてアークルフを見つめた。

潤んだ瞳は焦点が合わないようで、ゆらゆらと揺れ、焚き火の炎
がそれを照らしている。

少女の黒い瞳の中で炎が揺れる。

それはまるで神秘的な黒曜石のようで……。

なんて美しい瞳だ。

瞳の美しさもさることながら、今や怯えも消え失せ、ただ朦朧と
こちらを見る無垢な少女の様子に、アークルフの中に熱いものがこ
み上げてくる。

「ユーリ。もう大丈夫だ。安心して」

もう一度優しい声音で囁くと、少女の眦から涙が零れ落ちた。

思わず唇でそれを吸う。しっとりとした肌の感触は、これまで触
れた何よりも心地よく感じた。

一度口付けると止められなくなり、左右の目蓋に口付けた後、少
女の柔らかそうな半開きの唇を吸った。

「あ……んむ……」

掠れた声すら奪うように夢中で少女の口内をむさぼり、奥に潜んだ小さな舌を絡め取る。

唾液をすする水音が、今や小ぶりになった雨音と共に洞穴に響いた。

「う……」

息継ぎが出来なかったのだろう。少女が首を振ると、アーケルフは一度逃がしてやり、また角度を変えて少女を味わった。

「んん……」

少女の可愛らしい鼻声が、絡める舌の激しさを増していく。

アーケルフはすっかり我を忘れて猛っていた。少女の発する無意識の色香に、酔いしれていた。手は勝手に柔らかな素肌の上をさ迷い、思ったよりもしつかりと凹凸のある瑞々しい肢体を感じていた。

二人の呼吸が荒くなり、少女がぐったりしてきた頃、

「!」

アーケルフは自我を取り戻した。

腕の中では少女が目蓋を閉じ、アーケルフの体に全身を預けて荒い呼吸を繰り返している。

俺は一体何をしているんだ、こんな子供に……！しかも熱を出して苦しんでいるんだぞ、この子は！

アーケルフは恐る恐る腕の中の少女の様子を伺った。
ユーリの中から先ほどの怯えは消え、今はただ目を閉じ、穏やかな呼吸を取り戻そうと深い呼吸を繰り返している。

「ユーリ……」

アーケルフは少女を抱きなおし、目を閉じた。

「すまない」

抱きしめた少女の体からはほのかに柔らかな体臭が立ち上がり、アーケルフを再度くらくらとさせた。

だが、今度は自分を律した。

しばらく抱きながら頭を撫でているうちに、少女は眠ったようだった。

朝になり雨があがってもユーリは目を覚まさなかった。

昨夜ほどではないが、ユーリの体はまだ熱を持っている。

アーケルフは少女を抱え、急ぎ本日宿泊する予定だった宿場町へ馬を駆った。

清潔なベッドの上で少女を休ませてやりたかったのだ。

たどり着いた宿場町の中でも質の良い宿に少女を休ませることができ、アーケルフはやっと肩の力を抜いた。

宿場町から王都へは馬を駆けさせれば四半日、馬車を利用して一日の距離で、王都は目と鼻の先である。

そこから王都へ早馬を出させ経過報告をした。昨晚の刺客の件も合わせて調査する必要があった。

そしてユーリの件も……。

アーケルフは柔らかな寝台の上で眠る少女の頭を撫でた。

昨日の晩からそうすることがすっかり当たり前になっていた。

思いがけず夢中で口付けてしまったことに後悔は無い。

ただ、自分の衝動に驚いた。

女性経験は決して少ないほうではない。それなりに場数を踏んできたし、最中でも頭の隅では冷静でいるのが常だったが、昨晚は我を忘れてしまった。あんなことは初めてだった。

十代の少年の頃もあんな経験はしたことがない。

まるで媚薬でも吸い込んだような、甘く苦しいひと時だった。

それに、ユーリが発していた呪語のような言葉は一体……？

「……………」

考え込んだアークルフだったが、一つ頭を振ると、少女の額にキスを落とし、部屋を後にした。

【04話】 雨の匂いと少女の熱と（後書き）

ちよつと艶っぽくなってきたところで、本日の投稿はここまでです。
読んでくださりありがとうございます。

誤字脱字などございましたら教えて頂けると有難いです。

目を覚ましたら、視界に飛び込んできたのは見慣れない天井だった。

赤いビロードでできている。

ぐるりと周囲を伺うと、ビロードの天井には限りがあり、その長方形のふちの部分には金糸で出来た房がいくつも下りているのが見えた。

これは天蓋というやつだろうか。ユーリは更に広範囲を見回した。どうやら大きなベッドの上に寝ていたことがわかった。今までに見た事も無いような豪華なベットだ。赤いビロードの天蓋付。どこのお城だ、ここは……。怪訝に思いながら体を起こすと、少しふらついた。

体がだるい。一つため息をついて、部屋を見回すとピンクと赤を基調にした、それはそれは可愛らしくも上品な部屋にいたことがわかった。家具の類は高級そうな木材で統一されており調度品も美しいものばかりだ。

一体ここはどこなのか。

少し考えて、王都からやって来た騎士と一緒に村を出たのだと思いついた。

そうだ、私達襲われて……これを使ったんだった。

左手首に装着した銀色の腕輪。ユーリが初めてこの世界で目覚めたとき手に入れた森の追剥縁の品だ。今やすっかり私物化していて、

村の裏山で時折人目を盗んで練習をしたりしたものだ。昨晩は思いがけず大きな力が出たようで、いろいろあつて力が抜けた後のことはよく覚えていない。

くるりと辺りを見回したが人の気配は無い。

恐らくここへは同行の騎士が連れてきたのだろう。では、ここは王都だろうか。

ユーリが思いのほか高いベッドから苦心して降りようとしていたときだった。

「ユーリ！」

左奥の扉が開き、件の騎士が顔を出した。

やはり彼がここへ連れてきたのだな。そう思い、ユーリがベッドから降りると、駆け寄ってきた騎士に抱き上げられた。

「駄目じゃないか、まだベッドから出ちゃ！」

騎士は子供を抱えるようにユーリを抱き上げ、ベッドへ戻した。仕方なくユーリは上かけを腰の位置まで被り、ベッドの上に座った。

「あの……ここはどこですか？きしさんが、僕を、つれてきた？」

「ユーリ、騎士さんなんて止めてくれ。アークルフだ。アークつて呼んでくれてたろ？」

懇願されるように自分よりも年長の大きな騎士に見つめられ、ユーリは戸惑った。

何だか真剣にお願いされているみたいだ。名前を呼ぶかどうかと
いうだけの話なのに。

「……アーク」

「ああ」

戸惑いながらもユーリが名前を呼んでみると、騎士、アークルフ
は、嬉しそうに微笑んだ。

可愛いなこの人。初めて見たときはもっといかつい感じだっ
たんだけどな。

少し気まづくなってユーリが目を泳がせると、額に大きく硬い掌
を置かれた。

「もう熱は無いようだな」

「ねっ……?」

「ああ。丸一日熱を出して臥せていた。ここは王都に近いカイフ
アという宿場町だ。」

「……あの……すみません」

「なぜ謝るんだ?」

「えと……」

なんだか迷惑をかけたみたいだから……そう言おうと、ユーリが

足りない語彙を探しているうちに間があいてしまった。

するとアークルフがユーリの顎をすくい上げ、上向きにさせた。

「？」

ユーリが不思議に思っていると、アークルフの顔が近づいてくる。

「アーク？」

両手で頬を包まれ、間近で正面からアークルフを見つめる形になり、ユーリはうろたえた。

近くで見るアークルフの顔は、大きな体に反して繊細で美しいともいえる代物だった。長い睫と深い青色の瞳。少し上がり目で冷たそうに見えるが、笑うとくしゃくしゃになって可愛いらしい。通った高い鼻筋は男性らしくしっかりしている。少し下唇は厚め。でも全体のバランスが良い。顎は男性にしてはやや細めで整っている。決して女性っぽくはないのに細部が美しく調和がとれている。

こんなに格好よかつたんだ、この人。大きくて筋肉がすごそうな人ってこういうイメージだけだったのに……。

自分の顔が赤くなっていくのがわかる。

“離してください”

ユーリがそう言おうとするのと、アークルフの唇が近づいてくるのは同時だった。

その時。

「よお、アーケルフ。病み上がりの女性をまたベッドに戻す気か？」
からかうような楽しげな声に、ユーリもアーケルフも動きを止めた。

アーケルフは少女から手を離すと、腹立たしげに　少し恥ずかしそうに　開けっ放しにしていた扉の向こうを覗んだ。

「クレッド！勝手に入ってくるな！」

「そうは言っても、医師さんに“娘さんが起きたらすぐに診察します”って言われてるんだから仕方がねーだろ」

くだけた調子で言いながら、クレッドと呼ばれた男は部屋に入ってきた。

アーケルフよりもやや背の高い　とは言ってもアーケルフも充分背が高いけど　筋肉隆々とした青年は見るからに「戦士」という感じで、アーケルフが厳しい中にも優美さを持つ騎士だとしたら彼は気さくで粗野な傭兵か、というくらいタイプの違う男だった。アーケルフと同じ白銀の甲冑を身に着けているところを見ると、彼もまた騎士なのだろう。髪も瞳も濃い茶色で目鼻立ちにアーケルフのような美しさは無いが、男らしく整っている。いや、良く見ると鼻が少し歪んでいる。けれど決して不恰好ではなくそれもまた彼の魅力の一つのように見えた。口は大きめで、笑うと更に大きくなる。眉もアーケルフより太い。豪快そうな人だ、とユーリは思った。

ユーリがあっけに取られていると、男は二人に近寄り、少女の目の前で腰を折って挨拶をした。

「こんにちは、お嬢ちゃん（シルフィ）。俺はクレッド。クレッド
ウィン・アーウィル・システイクレイド。クレッドって呼んでくだ
さい、レディ？」

目の前で優雅にお辞儀をされ、ユーリは更にあっけにと取られた。
急に目の前の男が洗練された貴人のように見えた。粗野な傭兵な
んて思ってた申し訳ない。

ユーリは慌ててベッドから降りた。
マーナから習ったお辞儀の仕方しか知らないし、この返しであっ
ているのかわからないけれど、一応きちんと礼を返す。

「あ……はい。えつと……僕は、ユーリです」

「僕？……あれ、女の子だよな？……アークルフ、お前にお稚児趣
味は無かったよな？」

クレッドウィンは一瞬きよとんとすると、アークルフに視線を移
し楽しそうにからかった。

クレッドウィンとユーリの自己紹介の様子をむっとした顔で見て
いたアークルフは、クレッドウィンの言葉に更に青筋を立てた。

「俺にそんな趣味は無い！」

「だよなあ。じゃあ、お嬢ちゃんは“僕っ子”てやつか。アークル
フめ、乙な趣味だな」

クレッドウィンは更に楽しそうに笑い、アークルフは我慢するの
を止めたのか、それとも元々する気も無かったのか、クレッドウィ

ンの肩に拳を一発入れた。ユーリは驚いて目を見開いた。痛そうだがけれど、クレッドワインはそれをものともせずお腹を抱えてゲラゲラ笑っている。

「あ・・あの。……「僕（カイ）」はおかしいですか？「ああたし（ウヴリユシャイ）」は、言にくいのです」

ユーリが、自分が使っている一人称がおかしいせいでアークルフが笑われているのだろうか、と少し不安になってクレッドワインに言い訳すると、

「いやいや、「僕（カイ）」で良いと思うよ。可愛いし、君に合ってる。そうか、言語習得中だって話だったな。悪い！」

笑いすぎて目に滲んだ涙を拭いながら、クレッドワインは少女を見て優しく笑った。

「今のはお嬢ちゃんを笑ったんじゃないやなくて、アークルフをからかって遊んでいただけだ。すまねえな」

クレッドワインとアークルフは気のおけない仲のように見えた。あまり気にすることもないのかもしれない。

アークルフは未だクレッドワインを睨みつけていたが、ユーリは二人を友人だと判断し、気にしないことにした。

笑うと若くなると思っていたアークルフだったが、クレッドワインと話している様子を見ると更に若くなって最初の印象が薄れる。

悪いけどもうちょっとおじさんだと思ってたんだよね、アークルフのこと。

それにしても……シルフィとはどういう意味だろう。ユーリは初めて聞く単語に疑問を覚えた。

たぶん、私のことをそう呼んでいるんだよね。

「アーク」

アークルフの服の裾を引き呼びかけると、

「ん？なんだ、ユーリ」

さっきまでの怒った顔から一変し、アークルフは優しい顔でユーリを見た。

「あの……“シルフィ”とは、どういう意味ですか？」

「ああ。シルフィとは“ミ・シルフル（お嬢さん）”を崩した言葉でもっとくだけた表現だ。“ミ・シルフル”は知ってるか？」

「ん、わかります。シルフィ、意味わかりました。ありがとうございます、アーク」

少女の頭を撫でるアークルフと納得して頷いたユーリの様子を見て、クレッドウィンは驚いて言った。

「なんだ、“アーク”って。お前の新しい愛称か？」

「アークルフは言いづらい。短縮した名を覚えてもらった」

「へえ」

「何だ」

今度はニヤニヤと笑出だしたクレッドウィンにアーケルフは思い切り嫌そうな顔をした。

「随分と気に入っているみたいじゃねえか。昨日一昨日会ったばかりのお嬢ちゃんなんだろう？何があつたんだか」

「黙れ。さつさと医師を連れてこい！」

アーケルフが怒鳴るとクレッドウィンはもう一度ニヤリと笑い、観念したように大げさに両手を広げた降参のポーズを取てみせた。

「はいはい。了解しました、殿下（ディ・マークド）」

クレッドウィンは優雅なお辞儀を今度はアーケルフの前ですると、出てきた時と同じ扉から出て行った。

“ディ・マークド”ってなんだろう

ユーリの知的好奇心がまたくすぐられる。

村を出て何日も経っていないのに、村では聞いた事が無いような単語がいくつも出てくる。早く言葉を覚えたい一心でユーリはアーケルフの裾をもう一度引いた。

「アーケ、 “ディ・マークド”とは、どういう意味ですか？」

「……ユーリ、それは……」

アーケルフが何か答えようとしたその時、クレッドウィンがまた顔を出した。

「医師さんがお見えだ。お嬢ちゃんは診察してもらいな」

クレッドウィンの後ろから医師が続いて入室し、ユーリの質問はうやむやのまま流されてしまったのだった。

【05話】 悪友登場（後書き）

ユーリは本来の“僕っ子”とはちょっと違いますが、木下が好みに走ってこういう形になりました。

クレッドウイン登場です。彼のことはこの先ふくらましていきたいと思っています。

昨日は思いがけずたくさんの方に読んで頂いたようで、感激しています。ありがとうございます。

評価して頂いた皆様、お気に入り登録して下さいました皆様にも大感謝です！

更新はそんなに早くできないと思いますが、時々見に来て頂けると嬉しいです。

【06話】 お尻に湿布

白髪まじりの壮年の医師がユーリを診察をしている間、クレッドウインは部屋を出ていたがアークルフはユーリの後ろに控えていた。優しい医師は、念のためにと、ユーリに解熱剤を飲むよう促した。

「……………にがい」

「昨日も飲んだお薬ですよ。覚えていらっしやらないかもしれませんが……………」

飲んだ記憶は無いが、寝ている間に同じ薬を飲まされたらしい。

「それと、湿布の代えも用意しましたのでお渡ししておきますね」

医師はにつこりと笑い、長方形の手のひらサイズの布をユーリに手渡した。

「しつぷ……………ですか？」

ユーリが不思議そうにしながらも受け取ると、アークルフが後ろから説明する。

「ああ。丈夫で清潔……………きれいな布に薬を塗布……………塗ったものだ」

易しい言葉に変えながら説明してもらい、湿布のことか、と合点がいったので、ユーリはアークルフに頷いてみせた。

アーケルフと過ごしたのはこの数日だが、いつの間にか彼はユーリに新しい単語を覚えてくれる先生のようになっていて、村で過ごしたマーナとの日々を思い出させた。わからないことがあったら、まずアーケルフに聞いてみるのが当たり前になりつつあった。

「しつぷはどこに使いますか？」

怪我をした覚えは無いので、ユーリが怪訝な顔で医師に尋ねると、彼はにっこりと笑って言った。

「お尻です」

「え？」

「ですから、お尻です。……いや、女性の前で何度も連呼するのは照れますね」

「は？」

“お尻”ってお尻のことかな？

聞き間違いか、言葉を間違えて覚えているのか。

ユーリが混乱してアーケルフを振り返ると彼は気まずそうに目を泳がせた。

「アーケ……」

“お尻とはどういう意味ですか？”

そう尋ねようとしたユーリをアーケルフは「少し待ちなさい」と、

止め、少女の肩を背後から支えると、医師に言った。

「クレセントラス卿。貴公は下がられよ。王都から早馬での駆けつけ、感謝する」

「ありがたき幸せにございます、殿下（ディ・マークド）」

また“ディ・マークド”だ。

“ディ・マークド”のことを尋ねるべきか、“お尻”のことを聞いてみるべきか。

部屋から出て行くお医者さんの背中を見送りながらユーリが考えていると、くるりと体を回され、気まずそうな顔をしたアークルフと向き合う形になった。

「ユーリ、その……君が寝ている時に悪いとは思ってたんだが……」

「？」

「そのまましておくのと痛いだろうと思って……」

「？」

「尻に湿布を貼った。すまない」

「……アーク、お尻ってどこのことですか？」

嫌な予感がする。

ユーリは自分が“お尻”という単語を、決して間違えて覚えてはいない気がしていた。

「だから……君の……」このことだ」

「ひゃっ！」

ユーリの肩を支えていたアークルフの手がするりと下りて、彼女のお尻に軽く触れた。

「イヤ！」

ユーリが反射的に飛びのいて、アークルフの腕の中から逃げ出す。

「っ！ ユーリ、すまない。でも君のお尻は可哀想なくらいに赤くなって……。馬に乗るのは初めてだったのだろう？ 休みを入れつつもりだったが、やはり君には負担が大きかったようだ。考えが足りなくて申し訳なかった！ 湿布を貼れば少しは楽になるだろうと思ったのだが……」

矢継ぎ早にアークルフが説明する。彼は焦っていた。

馬という単語を聞いて、そういえばお尻はずっと痛かったことをユーリは思い出した。けれど、そんなにひどくはなかったのだ、それほど気に留めていなかった。今はそれよりも、目の前の“ちよつと格好良いかも”と思っていた男にお尻を触られたことが衝撃で、それどころではない。

「アーク、触る、ダメです！」

「ユーリ、そんなこと言わないでくれ」

ユーリの顔が真っ赤に染まる。顔が熱い。

目の前のアークルフも少し情けない顔をしている。

「ダメ！」

「そうは言っても、貼り替えないといけないし……」

「はりかえる!? ……僕、自分でします」

「しかし、これは軍で使用している特殊なもので貼り方にコツがある」

「僕、大丈夫です」

「使い方を知らない者が使用しても、上手く貼れないどころか手がべたべたになるぞ」

「自分でします」

「……君の手を汚すわけにはいかない」

アークルフはそう断言すると、後退りするユーリを捕まえ、再びくるりと回転させた。

背中から捕獲されて、ユーリがじたばたともがく。

「やっ!?!」

「ユーリ、すぐ済むから大人しくしてくれ」

「自分でするっ!! 僕、自分で……」

「ユーリ、いい子だから……」

アークルフが宥めるように優しく言うが、少女は必死でそれどころではない。

意識が無い時ならともかく　そのことについてもユーリは後でさんざんアークルフを責めたが　、すっかり覚醒している今、お尻に湿布なんて貼られたら、恥ずかしすぎて悶絶死間違いなしだとユーリは思った。いや、顔面に血流集中で血管が切れるかもしれない。

「アークのバカく！！」

ユーリは村の子供から覚えたささやかな罵り言葉をアークルフに浴びせたが、彼はそれを気にもせず正確に仕事をこなした。

つまり、暴れるユーリをやんわりと拘束し、お尻に湿布を貼り替えたのだった……。

「どつした、ひでえ面だな」

部屋に入ってきたアークルフに、クレッドウィンが楽しげに片眉を上げる。

「はあっ！ はあっ！ ……息が出来ねえ……腹いて……ふー……」
目尻の涙を拭い、ようやくクレッドワインが一息つく。
アーケルフはクレッドワインが笑い転げている間にもう一對の力
ウチに腰掛け、侍女が運んだお茶に口をつけていた。

「……で、お嬢ちゃんは？」

「……怒って部屋から追い出された」

「ぶははっ！！」

クレッドワインは再び噴出し、腹をよじって笑った。

「あゝ、面白れ〜。こりゃ、王都に帰ったらイーガンに話すネタに
困らなさそうだ！」

「あいつの話はやめろ。茶がまずくなる」

茶器を机に戻すと、アーケルフは顔をしかめた。

人使いの荒い幼馴染の不敵な笑みを思い出すと頭が痛くなる。

「あいつはあいつでお前のことを気にかけてんだぜ、つれなくすん
なよ」

「イーガンに気にかけてられて良い思いをしたことなど一度も無い」

「そりゃ、イーガンていうより妹の方だろ。俺もあいつには関わ
りたくない」

アーケルフは更に眉間にしわを寄せ、再び茶器に手を伸ばすと、乱暴に飲み干した。

「じゃあむやみやたらに話題に出すな。魔女はどこで何を聞いているかわからない」

「怖え……ぞっとするな。あの女にいろいろ勘ぐられているのを想像すると……」

「この話は終わりだ。で、お前の仕事はどうなった？ 報告をしてくれ」

ふざけて笑っていたクレッドウィンの表情が引き締まる。

彼はアーケルフの命を受け調査をしていたのだ。

「ああ。奇妙なことだが……お前の指定した場所に賊の遺体は一体も見当たらなかった。衣服の切れ端も地面に染み込んだはずの血の跡もだ。ただ、お前が言っていたように地面が抉れた箇所はあった。」

「……一体誰があの場合を掃除したっていうんだ？」

「さあな。ただ俺達が駆けつける前に誰かが痕跡を消したんだろう」

「……」

「魔術で消されたとしたか考えられない。今度の刺客は魔法士か」

「心当たりが無いでは無いが……。決め付けるのは早い」

「そうだな。まずは魔法局に相談だな」

「……結局あいつに助言を請わねばならないんだな」

アーケルフはため息をついて頭を抱えた。

「仕方ねえさ。イーガンの奴は喜ぶと思うけどな！ それに、どっちにしても魔法局には行かなきゃならないんだろ？ あのお嬢ちゃんのお申請をしに」

「ああ、そうだな……」

アーケルフは未だユーリの魔力の強大さを誰にも話していなかった。

彼の幼馴染にして従兄でもある魔法士に会わせれば、秘密も何も無く、すぐにわかってしまうのだろうか……。

アーケルフにしてみれば、少女の過ぎた魔力は懸念材料でしかない。

最悪、ユーリは魔法局に拘束される可能性もある。

二日続いた看病の間に、ユーリに対する執着が芽生えていた。

魔法局へ送り届けるだけであつたはずなのに、この後も少女を手放したくない気持ちになっている。

つい数日前に会つたばかりの少女に……。俺はどうかしている。

あの晩、炎を湛えた黒い瞳に魅入られてから、アーケルフの調子

は狂いつぱなしだった。

宿場町の宿の中でも上等のものを選び、その中でも王侯貴族向けの客室を用意させ、少女の衣類も最高級のもを準備させた。手ずから薬を飲ませ汗を拭き、眠る少女の看病をした。湿布に閉しても、侍女にさせればよかったのだろうが、自ら世話を焼きたかった。やましい気持ちが無かったかといえば嘘になるし、少女の赤く腫れた尻に口づけてしまったことを白状すると、きっと今よりも嫌われてしまつに違いない。

「……薬を口移しで飲ませたことも話さない方がいいんだろうな」

ぼつりとアークルフが呟くと、クレッドウィンは楽しそうに破顔した。

「ひっかき傷がまた増えるんじゃないのか？」

独り言を思いがけず拾われてアークルフは一瞬ばつの悪そうな顔をして「黙れ」と唸った。が、すぐに引き締めた。

「ユーリの様子を見て、明日出立する。お前の部下にもそう伝える」

「はいよ。かしこまりました、殿下」

クレッドウィンが笑いを引っ込め、敬礼の後に退出すると、アークルフは一人になった。

隣室は静かで、ユーリが出てくるような気配は無い。

アークルフはまた一つため息をつき、意を決したように立ち上がると、娘の寢室をノックした。

翌朝、一台の馬車が、馬に乗った数人の騎士に守られるようにして宿場町を後にした。

馬車の中には黒髪の少女が乗っていたが、町を行き交う人々の誰一人としてその存在に気づく者はいなかった。

【06話】 お尻に湿布（後書き）

ア、アークルフがだんだんヘンタイっぽくなっていく……おかしいな。クレッドウィンはこの先の話にも関わってくる存在なのでふくらませていきたいと思います。

この先、本話のような下ネタなのかエロなのかギャグなのかよくわからない話も出て参りますので、苦手な方はどうぞ読み進めることをご遠慮ください。よろしくお願ひします。

【07話】 王都到着

「よお、お嬢ちゃん。まだ怒ってんのか？」

窓を開けていいと言われたので、馬車の中から外の流れ行く景色を眺めていると、その窓枠の動く絵画の中にひょっこりとクレッドウインが顔を出した。クレッドウイン自身は馬に乗っているのだが、馬車に並走して近寄ってきたのだろう。ユーリは驚いて小さな声をあげた。

「馬車酔いしてないか、お嬢ちゃん？」

「……はい、大丈夫です。クレッドさん」

「名前覚えてくれたのか、嬉しいね」

「クレッドさんも、僕のこと、ユーリと呼ぶ、いいですか？」

「お。じゃあ、お言葉に甘えよう。ユーリちゃん、もう少くし走らせたら休憩するんで、あとちょっとの我慢な。何か不足してないか？」

そう聞かれて、ユーリは困ってしまった。

魔力を放出して寝込んでしまう前は、アークルフと二人で一頭の馬に乗って王都へ向かっていた。それなのに、宿場町を出る日にはこの大きな馬車が用意され、ユーリはその中で絹のワンピースを着て貴婦人よろしくゆったり座っているだけなのだ。やたらとクツシ

ヨンが積み上げられた車内のベンチはふかふかで、揺れも少ないし、お尻もほとんど痛くない。

“お尻”に思い当たって、ユーリは嫌なことを思い出し顔をしかめた。

熱が下がって目覚めた昨日、アークルフに捕まりお尻に湿布を貼られてしまったのだ。

つまるところ、アークルフは子供の世話をするようにユーリの面倒を見ていたんじゃないかと思ったり、ユーリは憤慨していた。ユーリは自分の年齢を覚えていなかったが、もう子供ではないという自覚があったし、娘なりの恥じらいも持っていた。アークルフの仕打ちはユーリの羞恥心を限界まで高め、その恥ずかしさと怒りから、ユーリはアークルフと口もきかずにこの一日を過ごしていた。

「……何もありません。大丈夫」

「なあ、ユーリちゃん。アークルフも下心はあったんだろうが、悪気は無かったと思うぜ。許してやってくれよな」

にっこりと笑うクレッドウィンに、ユーリは曖昧な笑みを返した。

“したごころ”ってどういう意味だろう？

答えを聞くこうにも、この数日言葉を教えてくれていたアークルフはユーリの乗る馬車の前方で馬を走らせており、クレッドウィンに尋ねるのも気が引けたので、ユーリは意図的に話題を変えた。

「あの、王都へは、あとどれくらいですか？」

「今日の夕刻には着くよ。あともう少しだ」

一行は既に昼食を取り、街道を王都へ向かって走っていた。次が最後の休憩になるようだ。

王都に着いたら、まず魔法局へ行くのだと聞かされていた。

魔力があることを申請したらそれで終わりなのだろうか。村へ返してくれるのだろうか。せっかく打ち解けたアークルフとも王都に着いたらお別れなのかもしれない。それを考えると、いつまでも怒っているとは良くない気もした。アークルフには随分と世話になったし、お尻のことを除くと、概ね良い人だったのだから。ユーリは、次の休憩でアークルフに話しかけてみようと思った。

“アークルフと話をして最後までいいお礼を言わなければ”。そう思っていたのに、ユーリはすっかりタイミングを逃してしまっていた。先刻の休憩時に顔を合わせたにも関わらず、恥ずかしくてすぐに馬車の中に戻ってしまったのだ。アークルフが何か話しかけようとした途端に顔が真っ赤になり、逃げ出してきてしまった。

馬車の小窓からちらりと外を覗くと、心配そうにこちらを見るアークルフの姿が目に入り、ユーリは気まずくなってしまう。目をそらした。あんなに怒ってしまった後で、どう話しかけて良いのかわか

らない。

「アークのバカ。あんなことするから、恥ずかしくて顔も見れなくなっちゃったよ。」

昨日の仕打ちを思い出し、馬車内で一人で悶絶しているところへ、クレッドウィンが乗り込んできたので、一緒にお茶を飲んだ。気まずい思いをしていたユーリの憂さを吹き飛ばすように、クレッドウィンは面白おかしく色々な話をしてくれた。初めて聞く単語ばかりで戸惑うユーリに、新しい言葉を教えてくれたりした。アークルフとは話せなかった休憩の間に、ユーリはすっかりクレッドウィンと打ち解けて話すようになった。

「お嬢ちゃん、もうすぐ王都だ」

先ほどと同じように、馬車の小窓に顔を近づけてクレッドウィンが言った。

少しの休憩を挟み、馬車は再び王都へ向けて走っていた。天高く照り付けていた太陽も、今や暮れかかっている。

「王城が見えてきたぞ。ほら、あの白いのだ」

そう言われて、ユーリは馬車の小窓から少し身を乗り出すようにして、クレッドウィンの指差す方向を見た。馬車の直進方向に大きな街が見えた。その後ろに、中央に高い塔を擁した白亜の城が控えていた。今、その城は夕日に照らされ紅色に染まっている。

「わあ、すごい……」

「美しい城だろ。この国の王がおわす城、リグワール城だ」

クレッドウィンが目を細めて、彼が仕える王の居城を讚えていると、

「ユーリ、危ない！ 身を乗り出すな！」

前方で馬を走らせていたアークルフが振り返り、焦ったように怒鳴った。

「い、ごめんなさい！」

ユーリは慌てて馬車の中に引込む。だから彼女は気がつかなかった。アークルフが思わず怒鳴ってしまったことを後悔し、顔をしかめたことを。

クレッドウィンはユーリに肩をすくめて見せると、アークルフが馬を走らせている前方へ移動していった。彼は彼で怒鳴ったことで落ち込むアークルフを慰めに行ったのだ。

アークに怒られちゃった……。もうすぐ王都でお別れかもしれないのに……。

ユーリは落ち込んでしまい、華やかな王都の街並みを楽しむこともなく、目的地に到着し馬車の扉が開くまで俯いていたのだった。

「ユーリ、着いたぞ」

馬車が停まったのは、三角に尖った塔をがいくつも夕空を突くように建つ赤レンガの立派な建物だった。
扉を開け、降車を手伝おうと手を差し伸べたのはアークルフだ。

「はい」

ユーリは気まずく思いながらも、アークルフの手を取り、馬車から降りた。

「ユーリ」

「はい」

「その、すまない。さっきは怒鳴ってしまって」

「いいえ。アーク、悪くないです。僕、危なかつたのでしょ？」

「ああ、肝が冷えた。もうしないでくれると助かる」

ユーリがおずおずと顔を上げると、アークルフはぎこちないながらも優しく笑っていた。

ユーリはほっとして、やっと言いたかったことを言えた。

「アーク、ありがとうございます。アークは、僕を、王都へつれ

てきました。それに、おいしいご飯も、服もくれました。馬車も…
…。ありがとう」

ユーリがそう言うつと、

「ユーリ、そんなことは些細なことだ。俺がやりたくてやったんだから。そうだ、馬車の乗り心地は大丈夫だったか？ 移動中不自由は無かったか？」

アークルフは首を振って、心配そうに聞いてきた。

移動中、聞きたくても聞けなかった懸念事項が次から次へと口をつく。

「ア、アーク、もう少しゆっくり話してください。僕、わからない。

“ささい”って何ですか？」

「ああ、そうだったな。すまない。……些細というのは……」

「ちょっとちょっとちょっと、ストップ！」

いつの間にかユーリの手を両手で包み込み、少女の小さな体に覆いかぶさるようにして接近していたアークルフを、クレッドウィンは引き剥がした。

「言葉説明すんのに、そんなに近寄る必要があんのか。落ち着け、ここは王都だぞ」

暗に、誰の目があるかわからないと目配せしたクレッドウィンに、アークルフははっとしてユーリから節度ある距離を取った。

一緒に王都へやって来たクレッドウインの部下は彼の遠く後方に控えており、馬車を降りたユーリの周りにはアークルフとクレッドウインしかいない。けれど、ここは既に王都で、しかも魔力のある者達が務める魔法局の門前だ。誰の目と耳がこちらを伺っているかわからない。

「すまない、ユーリ。……その、些細というのは取るに足りないこと、つまり、それほど重要ではない、ということだ。だから、俺が言いたかったのは……気にしないでくれてことだ。俺がやりたくてやったことだから」

アークルフはゆっくり話すことを心がけながらユーリに説明した。

「……はい、アーク。でも、僕、感謝してるので、“ありがとう”言いたいです」

「わかった。どういたしまして、ユーリ」

ユーリは彼女より大分背の高い　ユーリの背丈はアークルフの肩にやっと届く程度だ　アークルフを見上げて笑った。

世話になったアークルフに、お礼が言えたことに満足していた。

アークルフも少女を見下ろして小さく笑っている。

二人の間にお互いを思いやる優しい空気が流れた。

が、

「アーク。アークはヘンタイさんです」

「!?!」

少女の突然の言葉に、その空気がピシリと固まる。

「僕、アークはヘンタイさんだと思います。ありがとうございます。」

「!?!」

にこにこ嬉しげに笑いながら、少女が重ねて礼を言う。

アークルフはうるたえて、少女の意図がわからないまま、笑みを湛える小さな顔を凝視してしまった。心当たりがあるだけに、アークルフの背筋に冷たいものが走る。バレたか？バレってしまったのか、いろんなことが……。

「アーク？」

「い、いや……」

怪訝な顔でこちらを伺うユーリの視線から逃げるように、アークルフが目をそらすと、横で腹を抱えて小刻みに震える悪友の姿が目に見え込んできた。

「……クレッド、これはどういうことだ？」

「ぶはっ!!……ちょっと待て、今話しかけんな! マジで、腹イテ……ぶふっ!」

睨みつけるアークルフと笑いを堪えきれないクレッドウインの様子を見て、ユーリは不思議に思っていた。

あれ?使い方合ってるよね?“ヘンタイさん”って“良い人”って意味だ、ってクレッドさんに教えてもらったんだけどな。

そして、“アークルフに言うと言はれる”とも聞いていたユーリは、素直に本人の前で口にしてみたのだ。けれどどうやらユーリの意図通りにアークルフに伝わっていないようだった。

「アーク、あの、僕の言葉変でしたか？」

笑い続けるクレッドウィンの胸倉を掴み、その屈強な体を持ち上げんばかりに引き上げるアークルフを見て、ユーリは焦った。

そこへ、

「お前達、これは嫌がらせか？ 私の研究室の前でこれ以上煩くするなら、相応の覚悟をするんだな」

低く通る美声が降ってきて、三人の動きを止めた。

【07話】 王都到着（後書き）

年内最後の投稿です。読んでくださりありがとうございます。

お話はまだまだ動き出したばかりで、登場予定のキャラクターの半分も出てきていませんが、遅筆な自分を叱咤しながら頑張りたいと思っております。

それでは皆さん、良いお年を！

来年もどうぞよろしく願います。

ユーリは振り返って、ぽかんと口を開けた。

そこには、ユーリが今まで見たことが無いような美しい人間がいた。

腕の良い芸術家が彫り上げた彫刻のような容姿の男だった。

「アーケルフ、クレッドウィン。これ以上この魔法局の門前で騒いだら叩き出す。よくも俺の眠りを妨げてくれたな……」

美しい彫刻がしゃべりだした。皮肉っぽく片方の眉を上げて微笑む姿も美麗で絵になる。

整った眉。高く通った鼻筋。長い睫を湛えた瞳の色は左右で異なっている。夕日に照らされて色の判別は難しいが、ユーリの目には緑色と紫色に見えた。髪の色は夕日に染まってはいるが恐らく薄い金色か銀色で、肩を越した辺りで切り揃えられた直毛だった。

アーケルフやクレッドウィンのような筋骨隆々とした逞しさには欠けるものの、すらっと背の高いローブ姿のその人は、薄い唇に笑みを湛えたまま右手にぽんと炎の塊を生み出した。

「まずは、徹夜明けの安眠を楽しんでいた俺を邪魔したことへの謝罪から聞こうか」

それを見て、ぎよっとしたクレッドウィンが慌てて取り繕う。

「おいおい、イーガン、落ち着けよ！ お前だって職場の前で暴れて研究室をぶっ壊したいわけじゃねーだろ？ それに、アーケルフ

はお前の依頼でわざわざ片田舎まで出向いて戻ってきたわけだし……」

「……魔法局はちょっとやさつとの魔法攻撃では崩れはせん。それにアーケルフにしたって、暇そうにうるうるしていたのを有効活用したに過ぎん」

心なしかイーガンと呼ばれた男の手の上の炎が少し大きくなったような気がした。

「お前、ほんつとくに昔から寝起き悪いな。俺達はちょっと悪ふざけしてただけなんだ。うるさくして悪かったよ！ ほら、折角アーケルフの方からお前のところへ出向いてきたんだぞ。もうちょっと喜べよ！」

クレッドウィンに肩を叩かれ、まだ釈然としない表情のまま、それだけでは足りないとはかりにイーガンは横目でアーケルフを見た。促すようなその視線に、アーケルフは心中でため息をつきつつ、折れた。いつだって謝るのはアーケルフの方で、それで事がおさまってきたのだから今回だって同じことだ。

「悪かった、イーガン。お前の研究室が近くにあるとは知らなかったんだ。お前が眠っていたことも。申し訳ないな」

「……ふん、謝ればいいってわけじゃないが……まあ、いいだろう」

アーケルフの謝罪を受けて、ようやくイーガンが手のひらの上の炎を消した。不機嫌な様子を残しつつも、少し嬉しそうに見えるのは気のせいか。

「それにしても、お前の研究室がこの辺りにあるとは知らなかったな。以前に訪問した時は違う場所だったと思うが……」

「魔法実験をしていたら壊れた。今の研究室は新しい部屋ができるまでの仮のものだ」

「お前……魔法局はちょっとやさつとじゃ壊れないって言ってたじやねーか」

「ちょっとやさつとではな。俺の魔力はちょっとやさつとでは無い」

「怖え」

アークルフとイーガンの会話に横から入っていったクレッドウィン、三人のやりとりをユーリは大人しく見ていた。どうやら旧知の間柄でありそうな三人は親しそうに見えたし、口を挟める雰囲気では無かった。まだ紹介もされていないユーリがしゃしゃり出て壊すことはできないだろう。

「それで？ その少女がそうか？」

イーガンの視線がユーリの前で止まった。左右色の異なる美しい瞳に見据えられて、ユーリは少し萎縮したが、ゴクリと喉を鳴らし、しっかりと視線をイーガンのそれと合わせた。

「ほっ」

イーガンはそんな少女の様子を見て少し感心した。彼に見つめられると、大抵の婦女子は顔を赤らめて目を伏せもじもじしだすか、反対に目を輝かせて意味ありげな笑みを浮かべるかのどちらかだ。

それもイーガンが口を開くまで、と限定されてはいるが。

しかし、目の前の少女はイーガンの外見では無く彼の目を見て、その奥に潜んだ猜疑心を感じ取ったようだった。そしてすぐに、強い視線をこちらに寄こした。受けて立とうとでもいうのか。面白い。

そんなユーリをイーガンから隠すように、アークルフがユーリの前に立った。

「イーガン、彼女はユーリ、魔力持ちだ。記憶を無くしていて、三ヶ月前からコウイスタ村で保護されていた。言葉も話せないなので、現在言語習得中だ。特に大きな魔力持ちでも無さそうなので、申請をした後に村へ送り届けようと思っている」

「……魔力の無いお前が魔力持ちの魔力の大小を判断できるのか、アークルフ。それを判断するのは俺の仕事だ。少なくとも俺にはこの少女の魔力が大したものではないとは思えない。それに、言葉が話せなかったと言っていたな？ この大陸の共通語は一種類だ。確かに大小の民族語や方言はあるが、基本的には共通語に由来するものだ。この大陸で産まれた者なら共通語を解さないなんてありえない」

「だが、ユーリは記憶も無くしていた。記憶と一緒に言葉を無くしたってこともありえるんじゃないか？」

「……ふむ。しかし、一度習得した言語であれば、失ったとしても呼び起こすことができるだろう。まずはそれを試してみるか」

イーガンが細い顎を掴み考え込むと、クレッドワインが間に割り込んできた。

「おい！ お前ら、まずは自己紹介だろ？ ユーリちゃんが不安が

「つてるじゃねーか。勝手に二人でべらべら話を進めやがって」

クレッドウィンが明るい声で空気を変えたので、ユーリは少しほっとした。正直いうとかなり緊張していたのだ。目の前のイーガンという男に値踏みするように見回され、居心地も悪かった。

クレッドウィンはアークルフの背中につきぼり隠れていたユーリの手を引くと、イーガンの前に連れ出した。

「ほら、ユーリちゃん。こいつはイーガン。イーガン・ユグデイストル・オリヴィアード。一応オリヴィアード公爵様な。イーガンでいいぞ。この魔法局のお偉いさんの魔法士だが、気にすることはねえ、慣れると結構良い奴だぞ。最近薄毛が気になる微妙なお年頃。女にモテるが女嫌い。正直俺はこいつの将来が心配で仕方ねえ」

べらべらと楽しみに話すクレッドウィンをイーガンが青筋を立てて睨みつけているので、ユーリは更に居心地の悪い思いをした。アークルフも出会った当初は威圧感のある男だと思っていたが、イーガンはそれ以上だ。

「イーガン、この子はユーリちゃん。可愛いだろ？ この辺りじゃ見かけない黒髪に、つぶらで大きな黒い瞳。肌の色や骨格も珍しいよな。俺の予想じゃ海を越えた先にいるっていう海洋民族なんじゃねーかと思うんだよ。ほら、たまにいるじゃんか、港町で発見される漂流者。あいつらもこっちの言葉話せねーしさ。たぶんユーリちゃんもそうだと思うぜ」

「しかし彼らはもつと大柄だし、黒髪でもない。黒髪が多くて有名なのは東のデイマリオンだが、かの国は同じ大陸だし、もちろん共通語を話す」

「まあまあ、難しい話は一旦置いておけよ。そろそろ本格的に暗くなってきたし、中に入るうぜ！ お前の研究室に助手はいるんだろうな？茶くらい出せよ？」

クレッドウィンに肩を抱かれて、ユーリは赤レンガの建物の門をくぐった。不機嫌そうなイーガンと眉間にしわを寄せたアーケルフがそれに続く。礼儀正しく後方に控えていたクレッドウィンの部下を残して、4人は屋内へと入っていった。

* * *

「本当に門をくぐってすぐのそこだな、お前の研究室は……」

クレッドウィンが呆れてイーガンに言う。

「この部屋しか空いていなかったんだ、仕方あるまい」

「でも、お前一応局長なんだろ？ もうちょっと威張り散らして奥の塔の最上階にどーんと居座っちまえばいいのによ」

イーガンはクレッドウィンを横目で見ながら研究室のドアを開けた。

イーガンの後にクレッドウィン、アーケルフ、ユーリと続いて部

屋に入る。

「奥の塔は私室や食堂から遠い」

「……お前、また魔法局に住み着いてんのか？ 私室ってお前が勝手に私物化して作った部屋のことだろ？ そこで寝泊りしてんだろ？ 本当に面倒くさがりだな……」

「その方が合理的だ」

「俺にはただの不精にみえるけどな」

クレッドウィンはそう言うと、顔をしかめて室内を見回した。

イーガンの研究室は一言で言うと汚かった。机の上だけでは飽き足らず、床の上にも書類が山積みされていて足の踏み場も無い。実験用具だろう器具がいくつも並べられた机には深緑色の液体を湛えた瓶が並んでおり、その内のいくつかから細い煙が出続けている。応接機の周りの椅子やカウチの上にも書類が積み上げられており、かろつじて一脚だけ無事な椅子がある。恐らくイーガンが利用する椅子以外は全て物置になっているのだろう。部屋の奥には一人が横たわれる大きなカウチがあり、枕がいくつも積み上げられていた。先ほどまでイーガンはそこで眠っていたのだろうか、毛布がカウチの上に無造作に投げ出されていた。

「おいおい、ここどこで茶を飲むっていうんだよ」

「そこだ。机の上から書類をどけてくれ。丁寧にな」

「自分でやれよ」

クレッドウィンとイーガンのやり取りを、ユーリは少し途方にくれながら見守っていた。二人の話し言葉は速い。ユーリは頑張っただけ聞き取るうとしているが、何となく雰囲気ではしか理解できていなかった。

「ユーリ、大丈夫か」

アーケルフの言葉にユーリは小さく頷いた。先ほどからアーケルフの気づかうような視線に気づいていた。クレッドウィンに連れられて建物の中に入ったが、ユーリがきよきよと周りを見ている間に、いつのまにか隣に立っていた男はアーケルフに変わっていた。ユーリにしてみれば、数日間の違いではあったがアーケルフの方が付き合いが長かったので、少し肩の力を抜くことができた。

イーガンという男はユーリを胡散臭いものを見るような目で見ていたので、ここが目的地の魔法局というのならば、申請とやらも簡単には出来ないのではないか、と思った。しかしアーケルフはユーリのことを庇ってくれるつもりでいるようだ。少なくとも彼は、あの日ユーリが作り出した水竜のことを口外してはいないらしかった。それが何だか心強い。

「よし、片付いたぞ！ 次は茶だ。誰かに準備させるよ」

そうこうしているうちに、クレッドウィンが机や椅子の上の書類を片付けたらしい。イーガンに向かって茶のサービスを要求している。

「待っている」

ぱちんと音を立ててイーガンが両手を合わせた次の瞬間、机の上

に茶器が現れた。茶器の色柄が揃っていないのはご愛嬌というところか。ティーポットの注ぎ口からは細く湯気が立ち上っている。

「後は自分達でやれ」

イーガンはそう言うと、唯一書類が詰まれておらず無事なままだった一人がけの椅子に腰をかけた。どうやらいつもこの椅子を利用してしているらしい。

「おい、これどうやったんだ？」

クレッドウィンが怪訝そうに尋ねる。アークルフも呆然としていたし、ユーリは何度も瞬きをして突然現れた茶器を見つめていた。

「いつでも茶が飲めるように、一度準備させたものを別空間に保存しておくんだ。停止の魔法をかけてな。そうすれば飲みたい時に呼び寄せられる。助手や秘書がいない夜中に急に茶が飲みたくなった時に重宝する」

「お前の面倒くさがりもここまでくるとすげえな」

クレッドウィンはそう言うと、ティーポッドの中の茶を注ぎ始めた。

ユーリはアークルフに促されてカウチに腰掛けた。その隣にアークルフが座る。

「よし、入ったぞ。ほら、どうぞユーリちゃん」

クレッドウィンから茶の入ったカップを受け取り、ユーリは軽く頭を下げた。

その様子をイーガンがじっと見詰めていた。

「ユーリ、といったな。……お前は三ヶ月前にコウイスタ村に現れた。その時から記憶が無いというのは本当か」

目の前に置かれた茶器に目もくれずにイーガンはユーリに尋ねた。ユーリは口をつけていたカップを置き、イーガンを見つめた。探るような視線には真剣さがあり、嘘やごまかしは通じないように思えた。

正直に全て話せば村へ返してもらえるだろうか。記憶の無いユーリにとつて一番のより所はロッコとマーナの住むコウイスタ村だった。少なくともあの場所にいれば衣食住が確保されていたし、村長夫婦は親代わりのようなものだったからだ。ただ、平穩無事に村で暮らしていくには、いささかユーリの魔力は大きすぎると自覚していた。そのため二人の前では小さな魔力しか見せていなかった。

しかし、イーガンの前で魔力の弱いふりをして、果たして通用するのだろうか。ユーリにはわからなかった。少なくともユーリは、人を見ただけで魔力の有る無しを判断することはできないし、人の持つ魔力の大小を判断することもできない。けれど目の前の男はできるのかもしれない。

「……気づいた時、何も覚えていませんでした」

「言葉もわからなかったのか？」

「はい」

「お前は魔力持ちだというのが本当か？」

「はい」

「属性は何だ？」

「え？」

「魔力の属性は何だと聞いている。得意な魔法だ。火か、水か、風か、それとも土か？」

「……火と水、出したことあります」

「火と水両方か？」

「はい。……あと雷も」

考えた末に、ある程度本当のことを話そうとユーリは思った。

「……雷？ 雷を出したのか？」

「はい」

「お前は春生まれか、それとも夏生まれか？」

「え？……わかりません」

「そうか、記憶が無いのだったな……」

彼のクセなのだろう。顎を軽く掴んで考える様子を見せたイーガンを、ユーリは不安げに見つめた。先ほどから聞かれている質問の

意図がわからない。

二人のやり取りをクレッドウィンは興味深そうに、アーケルフは心配そうに見つめている。

イーガンがユーリに諭すように切り出した。

「いいか。魔力の属性には生まれた季節が大きく関係する。稀にその縛りを凌駕する者もいるが、ほんの一部だ。つまり、春生まれは火属性、夏生まれは水属性、秋生まれは風属性、冬生まれは土属性を持つのが一般的だ」

「はあ。……あのもう少しゆっくりお願いします」

「わかった、努力しよう。……季節の変わり目に生まれた者が、時折二つの属性を持つことがある。春と夏の境に生まれると火と水、それに加えて時折光属性を持つことがある。夏と秋の境だと水と風に加えて雷の属性を持つ者が現れる。秋と冬の境だと風と土に加えて闇属性を持つ者が……。何故か冬と春の境に生まれる者は土と火の二つの属性を持つのみだが……。」

イーガンが心持ちゆっくりと話してくれたので、ユーリは大まかに説明の内容を理解することができた。そして、理解することができた故に考え込んだ。その説明通りなら、火と水を使えるユーリが雷を出せるというのはおかしなことだ。

「お前の属性が火と水というのなら、もう一つお前が持っていておかしくないのは光属性だ。春と夏の境に生まれたと考えるならばな。だがお前は雷を出したという。これは生まれた季節に由来する魔力属性の理から逸脱した力だ」

「だが、稀にその理を凌駕する者もいるのだろうか？」

ユーリもその一人と考えれば良いではないか、とアークルフが横槍を入れた。

「ああ。だが、そういった存在は十中八九強大な魔力を持つ者だ」

「……」

ユーリは考え込み、アークルフは口をつぐんだ。強大な魔力。ユーリの能力は充分そう言えるのではないだろうか。

「ユーリ、俺は今この国で起きている、いや正確には起きていた、魔力のひずみについて調べている」

沈黙を破ってイーガンが話し始める。アークルフははっとして、イーガンを見つめた。

「魔力のひずみとは、空間のゆがみだ。俺が先ほど茶を別空間から出したように空間同士は繋がっていて、きっかけさえ与えれば物の行き来も出来る。空間がゆがむということは、繋がっていたはずの空間が分離することだと考えられている。そして空間がゆがむと、そこに、一時的に魔力を使うことができない場所が生まれる。それが魔力のひずみだ」

「……ごめんなさい、難しいです。僕、よくわからない」

ユーリは混乱していた。

イーガンは珍しく少し困ったような顔をした。彼にしてみれば言語を解さない存在と会話するのは初めてのことだ。イーガンが話す

内容は理屈っぽいし、選ぶ言葉も難しいことが多い。そもそもイーガンは子供と会話を成立させることができない。ユーリのことも精神的には大人であっても、会話能力という点では子供と変わらないと考えるのならば、会話を成立させるのは難しくなるだろう。

しかし、ユーリは見る限り聡明そうな少女だ。イーガンが易しくゆっくり話すことを覚えるよりも、彼女の言語上達の方が早いようにも思えた。

当面は間に誰かに入ってもらえばいいだろう。

イーガンは、アークルフに視線を寄こした。

「わかった、俺が後でちゃんと説明する」

伝わったらしく、アークルフが頷いた。イーガンも頷いてみせた。

「よし。……ユーリ、お前はしばらく魔法局で預かることにしよう」

「え？」

「ユーリ、魔力のひずみは半年前この国の郊外で報告された。そして、三ヶ月程前に消えた。……俺が気になっているのは、ユーリ、お前がコウイスタ村に現れた時期だ。ひずみの報告された地帯はコウイスタ村近郊であり、お前はひずみが消えた時期に村へやってきた……これは偶然か？」

「……僕にはわかりません」

ユーリは困って目を伏せた。森で目が覚めた以前の記憶はユーリには無い。どうやってそこにいたかと聞かれても答えようが無いの

だ。しかし、ユーリは緊張しつつも落ち着いていた。イーガンの話す内容は難しくてよくわからないが、どうやら責められているわけではなさそうだからだ。

「あの……魔法局で僕は何をしますか？」

「そうだな。当面は俺の元で魔力のひずみに関する調査を手伝ってもらおう。お前が知らずとも関わっている可能性は高いと俺は考えている。目の届く範囲にいらった方がいいからな……。その間、魔力に関することは俺が教えてやる。見たところお前の魔力は高そうだが、使い方をよく知らないのだろう？ それに、言葉に関しては……アークルフ、お前が教えてやれ。どうせ暇だろう？」

「アークが？」

ユーリは隣のアークルフを振り返って見た。

「……魔法局に毎日通うのは気が重いが……ユーリのためなら喜んで」

アークルフが笑ったので、ユーリは少しほっとした。見知っている人が毎日側にいてくれるのならば、心強い。

「では、ユーリの部屋を用意しよう。そうだ、今は誰も使っていないし、赤の部屋でいいだろう」

イーガンの言葉に、茶をすすりつつ三人の会話を聞いていたクレッドウインがむせた。

「じほっ！ ……ちょ、ちょっと待て！ ……じほっ、じほっ！

……赤の部屋だと？」

「そつだ。今は誰も使っていない。問題無いだろう」

しれつとイーガンが言つてのけたので、アークルフも焦った。

「待て、ユーリは俺の離宮に連れて帰ろうと思っている。魔法局へは毎日通う、これでいいだろう？」

「バカか、お前は。お前がお前の宮に子供とはいえ女を連れて帰ってみる。今まで計画してきたことが台無しじゃないか」

「しかし……」

「まあ、ユーリちゃんにしてみても噂の的にされちゃ可哀想だしな。お前のところに女がいるって噂が流れれば、ユーリちゃんが悪目立ちしちまうだろう。魔法局にいてもらった方が良いんじゃないのか？ 毎日通えばいいじゃねーか」

渋るアークルフにクレッドウィンが宥めるように声をかける。

「……しかし、赤の部屋は……」

なおも渋るアークルフに、イーガンは気にする素振りも無く言った。

「メリンダは女が好きだ。あの部屋は男が入ると不吉なことが起きるが、侍女や女性職員ならば入れるし掃除もできる。ユーリは女だし、問題なく生活できるだろう。幸いなことにあの部屋には寝台もあるしな」

「よりもよってメリンダの部屋に……他にもあるだろうに……」

「今は誰も使っていない。それに、あの部屋は俺の部屋にも近いし、何かあった時にすぐに対応できる。この研究室にも食堂にも近いから合理的だ」

イーガンはそう言うとは無を言わさない様子で立ち上がった。

「ほら、さっさとしろ。行くぞ、赤の部屋に」

三人の様子を見て、ユーリは不安になった。一体どんな部屋を宛がわれるというのだろうか。

しかし、今のところは従うしか無さそうだった。ユーリは仕方なくイーガンの後に続く。

後ろから心配そうなアークルフとクレッドウィンが続いた。

赤の部屋って一体……？

【08話】 王都の魔法士（後書き）

あけましておめでとつごぞいます。
本年もよろしくお願いします。

【09話】 赤の部屋

『魔力保持申請』の手続きはすぐに終わった。

申請書に名前と出身地と魔力属性を記入して、身元保証人の項目にイーガンのサインをもらって、書類を提出したら終わり。

申請書の提出先は魔法局の一階の住民課だ。住民課とはいっても魔法局の住民課が取り扱うのは魔力を持っている住民のみ。ユーリはそこに行き申請書を提出した。

黒ぶちメガネをかけた窓口のお姉さんが、ペンをくるりと反対に持ち替え、インクのつかない方で一箇所ずつ項目を叩きながら確認していく。最後の身元保証人欄を見て、彼女はにこりと笑った。

「局長が身元保証人ですね。問題ありません。本日中に受理しましたよ」

赤毛をぴたりと後ろでまとめた、なかなか美人なお姉さんはにこりと笑って、ぼんと受理印を押した。

「ありがとうございます」

お姉さんがすぐに発行してくれた申請書控えを受け取り、ユーリはぺこりと頭を下げた。

「いいえ。それにしても、あなたも大変ね。配属されたと思っただら、すぐに“ひずみ調査”の手伝いをしているんでしょう？ それも局長付きと聞いたわ、ご苦労様。住民課には外からの差し入れも

よくあるから、そこに置いてあるお菓子は自由に食べていいわよ。
時々息抜きにいらっしやいな」

カウンターにはお菓子がたくさん入った籠が置いてあり、ちょうど出入り口の近くにあることもあり、魔法局を出入りする従業員が住民課を通るついでにお菓子を置いたり、持ち帰ったりしているようだ。ユーリは再度「ありがとうございます」とお礼をいって、キヤンディーを二個取ってポケットに入れた。

「ところで、あたしはデリアって言うの。よろしくね」

手を差し出されたので、ユーリは慌ててその手を取り、握手をした。綺麗に整えられた爪はベージュ色に染められていて、彼女の雰囲気によく合っていた。

「あ、僕、ユーリです。よろしくお願いします」

「よろしくね、ユーリ」

デリアは感じの良い人だ。

ユーリが魔法局に来て一週間が経とうとしていたが、環境の変化についていくのにやっとで、本当にあっという間に時が過ぎてしまった。毎日イーガンの部屋か語学学習用に与えられた客室で日中を過ごすので、こうして魔法局の職員と話す機会も今まで無かった。そもそも毎日顔を合わせるのはイーガンとアークルフ、時々やって来るクレッドウィンの三人に限られており、他の人、しかも妙齢の女性と会話するのは一週間ぶりだ。何だかほっとする。

“妙齢の女性と会話”という点ではその機会は每晚あるともいえる。が、彼女のことを“妙齢の女性”というのはいささか語弊があ

るとも思う。少なくともデリアのように見るからに大人の女性という姿かたちでは無いので、ユーリは彼女のことは数に入れないことにした。

「はい。よろしく願います、デリアさん。じゃあ、僕はこれで……」

もう一度頭を下げると、ユーリは同じ1階にあるイーガンの部屋へ向かった。

ユーリの一日のスケジュールはこうだ。

朝起きて、朝食を取り支度をする。

午前中は勉強の時間だ。アークルフに読み書きを習ったり、時々イーガンから魔力の基礎を習ったりする。イーガンの魔法講座はその日の流れで丸一日かけて行なわれることもある。

午後はイーガンの部屋で“魔力のひずみ調査”の手伝い。とはいえ、ユーリにできることはほとんど無いので、イーガンの部屋の書類の整理や片付けをしている。

夕刻になったらイーガンと夕食を一緒に取り、そこでユーリの予定は終了。時々アークルフと一緒に夕食を取ることもあるが、忙しい時は顔を出さない。

夜は自分に宛がわれた部屋で過ごすのだが……毎晩現れる珍客と話すことが日課になっていた。

「師匠、ユーリです。もどりました」

扉をノックすると、「入れ」と中から声がしたので、ゆっくり開けた。

あれ？

ユーリは驚いた。イーガンがいつもの焦げ茶色のローブ姿ではなく、若草色のローブに金色のマントを羽織っていたからだ。

「どこか、行くんですか？」

いつものシンプルなローブでは無く、金糸の刺繍の入った豪華なデザインのローブを来たイーガンはいつそう美しく見えた。淡い金髪と左右異なる目の色、とりわけ緑色の目の色に良く映える装いだ。

「ああ。王宮に行く。夕食は部屋で取るように」

「わかりました」

出かけるイーガンを見送ると、ユーリは部屋を出る前に室内をぐるりと見回した。

また書類があちこちに置きっ放しになっている……。

一つため息をついて、ユーリは軽く部屋を片付け、部屋を出た。

魔法局の門に一番近い建物の一階にイーガンの研究室はある。同じ区画に住民課があり、その真上である二階の同じ間取りに職員用の食堂がある。ユーリとイーガンの部屋は三階にあるので、一日の行動範囲が一つの建物の中でおさまってしまう。イーガン曰く「合理的」な生活スタイルなのだそうだ。

この日もユーリは寄り道する事無く三階の自室に戻った。

廊下には全く同じ造りの重厚な扉が等間隔で並んでいるが、どの部屋も使用者に合わせて内装が違っらしい。今この階を利用して居るのはイーガンとユーリだけだが、ユーリは自室以外の部屋に立ち入ったことは無かった。

ユーリが使用している部屋は通称「赤の部屋」である。

内装が全て赤を基調にデザインされており、家具や調度品も女性向けに作られた可愛らしい部屋だ。壁紙も赤とワインレッドの縞模様、絨毯もワインレッド、椅子やカウチのクッションもワインレッドか濃いピンク色。ベッドカバーも天蓋もワインレッド色のビロード素材ときている。初めてこの部屋を訪れた際は、その色調に面食らったユーリだったが、一週間も暮らしているとだんだんと慣れてきた。

この部屋にまつわる逸話は、部屋の色調とは別のところにあつた。女性が使用する分には問題が無いが、男性が立ち入ると不吉なことが起こるといふ噂があるらしい。そのため、当初アークルフやクレッドウィンはユーリがこの部屋を利用することを心配していた。そもそも彼らはこの部屋の前の使用者と知り合いらしく、そのことも懸念材料の一つであるらしかった。

実際、部屋に初めて入った時、ユーリもピンと張り詰めた空気を感じた。

が、すぐにそれが消え失せ、柔らかな暖かい空気が満ちたので、扉の向こうでこちらを伺う男性三人に心配無いと頷いてみせたのだ。

今ではすっかり部屋にも馴染み、アークルフやクレッドウィンもユーリの落ち着いた様子を見て安心してようだった。

「ただいま」

実はこの部屋には三人には明かしていない秘密がある。

部屋に入った初日、男性三人が去り、ユーリが一人になった時のことだ。

「ありがとう」

部屋には魔法がかかっていてユーリの行動の補助をしてくれたのだ。今も、ユーリから上着を受け取るとクローゼットに自動的に閉まってくれた。まるで有能な透明人間の執事がいるようだ。ブーツを脱ぐと片付けて皮の手入れまでしてくれるし、顔を洗うと目の前にタオルが現れる。痒い所に手が届く、非常に便利な「お手伝い機能」が部屋に装備されていて、ユーリはとても満足していた。なるうことなら、この機能がイーガンの研究室にもあればいいのに。そうすればユーリは毎日書類と格闘しなくてもよくなる。

ユーリはぽいぽいと衣服を脱ぎ捨てた。脱いだ傍から自動的に衣服が片付けられていく。浴室に入ると「今日はどれが良いですか？」と尋ねんばかりにシャワージェルがいくつも目の前に現れた。

「今日は普通のがいい。におい、きつくないもの」

ユーリがそう言うと、一つを残してシャワージェルが棚に戻った。ユーリは残ったシャワージェルを受け取ると、鼻歌を歌いながら適温に準備されたお湯に浸かり、一日の疲れを洗い流した。バスタイムを楽しみ、差し出されたタオルで髪や体の水分をふき取ると、ユーリは用意された下着とガウンを着て浴室を出た。すると、食卓には夕食が準備されていた。ユーリが出るタイミングを見計らって準備されたのだろう、スープからは温かい湯気が立ち上っている。

「おいしそう」

今日はイーガンもアークルフもない、一人きりの食事だ。

けれど、ユーリは今あまり寂しさを感じていなかった。この部屋、赤の部屋にいと、あまり一人でいる感じがしない。常に誰かに見守られているような気がする。それは決して嫌な感じでは無く、ともすれば村に帰りたくなって心が沈むユーリを慰めてくれるものだった。それでも最初の頃はこの部屋にいても寂しさを感じないわけでは無かった。

日中は平気だ。アークルフは毎日のように顔を出してくれる。イーガンも当初思っていたよりもとつき難くは無い。クレッドウィンも時折やって来る。三人の男達に慣れてきたし、魔法局での生活もそれなりに忙しく充実している。読み書きの勉強も楽しいし、何より魔法を学べるのは興味深かった。ユーリは独学で魔法を使っていたため、一度に魔力を放出し勝ちだったのだが、それも適量に補整できるようになってきた。魔法局に来なければこんな機会も無かったのだろうと思う。

しかし、夜になり、一人になるとどうしても寂しさが勝ってしま

う。突然の環境の変化に戸惑い、村での生活を思い出してしまう。
ロッコやマーナの顔を思い出すと寂しくなるのだ。

そんな時にライラは現れた。

「あら、今日はこっちで夕飯なの？」

今日もこうして夕飯の席に着くユーリの元に彼女は突然現れた。

「ライラ。うん、今日は師匠、でかけました」

「ふーん。アークルフは？」

ひらりとライラが腰掛けるユーリの膝に飛び乗った。

ライラは淡い金色の長毛種の猫だ。紫色の瞳がとても美しい。その色合いは、イーガンのもう一つの瞳の色によく似ている。話し口調からしてメスなのだと思う。赤の部屋で眠りにつこうとしていた最初の晩、ホームシックにかかり落ち込んでいたユーリのベッドの中に潜り込んで来たのが最初の出会いだ。言葉を話す猫にユーリは驚いたが、ライラがあまりに何でも無いことのように振舞うので、そういう存在もあるのかもしれないと考えを改めた。

何よりライラは大人とばかり接していたユーリにとって初めての“友達”といえる存在になりつつあり、夜一人で時間を過ごす際の慰めにもなってくれていた。

「アークは午後からお仕事。明日来ます」

「そう。アークルフもイーガンもきつと王宮ね」

「ライラ、良く知ってる。師匠、王宮に行くと言いました」

「まあ、今この国もごたごたしてるからね。イーガンも魔法局に籠もってばかりはいられないわよ」

「ごたごた？」

「大変なこと。あいつらも何かと忙しくなると思うわ」

「……僕、お仕事の邪魔かな……」

「あら、そんなことないわよ。あいつらだって好きでやってるんだから！ ユーリだってわざわざコウイスタから出てきて、あいつらに付き合っただけでやってるんでしょ？ 言葉や魔法だって教えてもらって当然よ！」

「そう……かな？」

「そうよ！ ほらほら、夕食が冷めちゃうわよ！ 私はここで寛いでるから、さっさとお食べなさいな」

急かすように言うと、ライラはユーリの膝の上で丸くなり目を閉じた。

ユーリは膝の上に長毛種の美しい猫を乗せたまま、夕食を取り始めた。

一通りの食事を終え、ユーリが食後のお茶を楽しんでいると、ライラが目を開け尋ねてきた。

「ねえ、ユーリ。しんどいことない？」

「んん？ 僕、大丈夫」

「そう。何かあったら言うのよ。溜め込まないでね。……イーガンは人使いが荒いし、クレッドウィンは図々しいし、アーケルフはちよつと頼りないところがあるから……心配だわ」

「師匠、そんなに怖くない、初め会った時よりは。クレッドさんは楽しいし、アーケルフは優しいです」

「ふん。そもそもあなたに“師匠”なんて呼ばせるところが気に食わないわ。一体何様のつもりなのかしら」

「他にも候補はあったけど、“師匠”が一番発音しやすかったから……」

「そうなの？ それならいいけれど」

不服そうに前足の毛繕いを始めたライラの背中を、ユーリはゆつくりと撫でた。

「……僕、お手紙かけるようになりたいな……」

「手紙？ ……もしかして、コウイスタ村の村長へ書くのかしら？」

「うん。心配してると思うから……」

「そうね。魔法局から連絡はいつているとは思つけど、あなた自身から手紙をもらったら村長夫婦も嬉しいと思うわ。明日はアーケルフと読み書きの勉強をするのでしょうか？ その時に手伝わせない

「よ」

「うん、……アークに手伝ってもらつ。明日お願いする」

「あら？ 何、ちょっと赤くなってるの、ユーリ？」

「え？ な、なんでもない……よ」

「何でもないって感じじゃないわ。……あなた、まさかアークルフのこと……」

「ちがうちがうちがう！ アークは格好良いけど、僕と年が違うし。アークは僕のこと、子供と思ってるし……」

「何かされたの、ユーリ！？ 変なことされたらすぐに言うのよ？」

「へ？ ……うん、だ、大丈夫。……前に、お尻に湿布貼られたけど……それだけ」

「な、何ですってえ！？」

ライラがユーリの膝の上から飛び降り、猫特有の金切り声をあげた。

かと思うと、一心不乱に絨毯で爪を研ぎ始めた。

「ラ、ライラ！ どうしたの？」

「何て事なの、あの野郎！ 今度会ったらめっためたのぎったぎたにしてやる……！」

「ライラ、落ち着いて。絨毯、壊れるよ?」

「このくらいすぐに直せるわよ! 気にしないで、ユーリ。こっやって怒りを静めてるの!」

「え? 怒ってるの? 怒らないで、ライラ! アークは僕のこと、子供と思ってるだけ……」

「そんなわけないじゃない! あいつは絶対わかっててやったに決まってる! 他の二人に比べたらまともだと思ってたのに、何てこと! 女の敵だわ!」

「ラ、ライラ。あの、僕、もう怒ってないから。大丈夫」

ユーリは絨毯をぼろぼろに崩していくライラを止めるべく、自身も椅子から降りて床の上に座り、ライラを抱き上げた。

「あなたはまだ怒っているべきよ! どうしてあんな奴許しちゃったの?」

ライラはまだ怒っているらしく、肉球の間から鋭い爪が飛び出していたままだ。

「え、でも……アーク謝ってたし。ちょっと可哀想で。……それに、ずっとケンカ、嫌だった……」

「そう! そうなのよ! あいつは昔からそうなの! 申し訳無さそう顔しながらも押しが強いのよ! それを許しちゃダメよ!」

「え……でも、もう終わったし。僕も、もう怒ってない」

終わったことだからもう良いだろう、というユーリの意見に賛同できずに、ライラはユーリの腕の中から飛び降りた。

「ユーリ、今度何かあったらすぐに言いなさい！ 確かにアークルフは見た目はちょっと格好良いかもしれないし、可愛げもあるから許してあげたくなるかもしれない。でも流されちゃダメ！ 絶対ダメ！ むうう……よし！ 念のためにこれをあげるわ」

ライラは自分の体から毛を一本抜き取り、ユーリの右手の小指の上まで銜えて持ってきた。金色の毛が小指の上に落ち、絡んだかと思っただけで消えた。

「あれ？ 無くなった……」

「そう。でも実際はまだ小指に絡んでいるわ。一種の防犯用のおまじないよ。あなたに危険が迫ったら反応するの。期限は無いし、普段は気にならないから安心してね」

「うん……ありがとう、ライラ」

これがアークルフに危害を加える事は無いだろうか、と少し心配しながらもユーリは猫に礼を言った。

「どういたしまして、ユーリ。……いい？ 男は獣よ。もっと用心しなさい！」

「へ？ ……う、うん」

自身も獣であるはずの猫に鋭い口調で言われて、ユーリは思わず

頷いた。

その日は機嫌の悪いライラと共に眠りに着いた。

ライラの説教はしばらく続き、ユーリは途方に暮れながら早く眠れるよう祈った。

翌朝、いつも通りの時間に起きたユーリが枕元を見ると、

「おはよう、ライラ。また夜にね」

長毛種の猫のぬいぐるみが転がっていた。

ライラは夜にしか現れない。彼女は、昼間は猫のぬいぐるみの姿で、ベッドサイドに飾られている。夜になると再び生きた猫になってユーリに話しかけてくるのだ。

これもまた「赤の部屋」の不思議の一つ。

ユーリは部屋の便利機能に助けられつつ朝の支度を整えると、

「いってきまーす」

今日も元気に部屋を後にした。

【09話】 赤の部屋（後書き）

しばらく更新頻度が落ちると思います。申し訳ありません。
書き溜めて放出する予定ですので、今しばらくお待ちくださいませ。

【10話】 王位継承権

リグゼンディスタ第七代国王、クラウデイス・コーネリアウス・リグゼンディスタ。

弱冠十八歳で即位した彼の治世は、三十四歳になる今、十五年にわたるものとなった。

死後はおそらく「商業王」と呼ばれると推測されるかの国王は、周辺の国々に比べて新興国であるリグゼンディスタの王都リグゼンドラを一躍商業都市へ発展させた。

大陸の西の端に位置するリグゼンディスタは気候も穏やかな平地に在り、西側に大海を抱き、王都付近にラウト、ミティス、イーニスの三つの河川を有する。そのため船での物品輸送に適しており、また場所柄南方と北方を繋ぐ中継地点として優れていた。

しかし、建国当初は領土拡大のための侵攻を繰り返していたこともあり、クラウデイスの祖父の代までは情勢も不安定であった。

中央集権が確立されて久しいクラウデイスの治世になり、初めてその有利性を活かし交易都市として発展することができたのだ。つまり、南方の国際商業地帯と北方商業地帯の中継地として年に六回の交易市を開催し、商人の保護、国内の経済活性を行なうことで、リグゼンディスタはかつてない富の時代を迎えていた。

そのリグゼンディスタ国王には弟が一人いる。

アークルフ・ルーグラスティス・リグゼンディスタ。国王と七歳年の離れた王弟は、王が王妃との間に儲けた王子を差し置いて第一位王位継承権を持っている。

もちろん王子が生まれる前までは、当然のように継承権の最高順位はアークルフにあった。クラウデイスの男の兄弟はアークルフしかいなかったからだ。しかし、十年前に国王に嫡男が生まれ、アーク

クルフの順位も二位に繰り下げになると思われたそのとき、

「継承権第一位はアークルフ・ルーグラスティス・リグゼンディスタに据置くものとする」

他でもないクラウデイス国王が並居る臣下の前で告げたのだ。

もちろん国は揺れた。

嫡男に継承権の最高順位を与えない理由は「病弱であるから」とされたが、王妃と王妃の周辺貴族はそれで納得するはずがない。

しかし、王は考えを変えることは無かった。

病弱とされた王子が十歳になるまで成長した現在も、王弟の王位継承順位は一位のままである。

「イーガン、お前も来ていたのか……」

「ああ。陛下にはお会いしていないが、宰相殿に呼ばれてな」

「ひずみの件か……。被害に遭った者は多くは無いが、その被害が重大だからな……」

「財務大臣の孫も被害に遭ったらしい。魔法学院では優秀な生徒だったそうだ」

「魔力の回復の見込みは無いのか？」

「無い。この三ヶ月回復する様子は見られない。元々優秀な魔力持ちだったようだから、気落ちも人一倍だろうな」

王宮の廊下ではつたりと顔を合わせたアークルフとイーガンは、小声で会話しながらアークルフの私室へ入った。アークルフは王宮内に敵が多い。彼の行動を監視している者も少なくないため、王宮内での会話はどうしても小声になりがちだった。

重厚ながらも美しく整えられたアークルフの私室には応接室が設置されている。主に来客用に使用されているその部屋で、二人が椅子に腰かけると、すぐに侍女が茶を運んで来た。

イーガンは侍女が退室するの確認すると、詠唱を始めた。

「よし、いいぞ。結界を張った。これで外部に会話は漏れない」

イーガンが詠唱を終えそう告げたので、アークルフは頷いてみせた。

イーガンはこの国の魔法士として最高位にあり、第一人者だ。彼が張った結界をおいそれと破れるものはいないだろう。

イーガンは茶を一口飲むと、早速切り出した。

「俺はやはりひずみの件とユーリは関わっていると考えている」

「しかし、ユーリはいたずらに他人に害をなそうと考える娘ではない」

「わかっている。俺もこの一週間あの娘と過ごしてみて、少なくともこの国に害をなそうと企む間者では無いことはわかった」

「お前……あれだけユーリをこき使っておいて、そんなことを考えていたのか……」

少しばかり不服そうに睨んできたアークルフを、イーガンは鼻で笑った。

「ふん、お前だって最初の頃は疑っていただろうに、今ではすっかり骨抜きだな。俺は正直驚いているぞ。お前がこれだけ一人の人間に執着するところは初めて見た。いつだって女には冷静に対処してきただろうに……」

「いや……俺も戸惑っている。こんなことは初めてだ」

「ふっ、お前に少女を好む性癖があったとはな。今まで言い寄ってきた女共もあの女狐だって驚くに違いないさ」

「うるさい、黙れ。俺は別に少女が好きなわけではない！」

「だが、ユーリはまだ子供だぞ。お前とは年も十以上離れているだろうに」

「確かに年は離れているが……ユーリは特別だ」

「……折角お前に真剣に想える相手ができたんだ。俺も生暖かく見

守ってやりたいところだがな……」

生暖かくとは一体どういう意味だ、笑うイーガンを見てアーケルフは少しぞっとした。

子供の頃から一緒に過ごすことの多かったイーガンだが、アーケルフはこの従兄のことが少し苦手だった。幼少の頃から才長けていたイーガンは、よくアーケルフやクレッドウインを魔術でからかって遊んだし、その苛烈な性格は容易に他者を受け入れず、よく問題を起こしては二人を巻き込んだ。特にアーケルフはイーガンに好かれていたらしく、ちよっかいをかける度合いもクレッドウインに比べてひどいものだった。

大人になった今でもイーガンはこちらを気にかけてくれているようだ。だが、アーケルフにとっては、有り難いが勘弁して欲しいことだった。

「あの娘に心を許すのは早すぎる。そもそも正体が不明だ。先ほど間者では無さそうだと聞いたが、もし記憶を無くした間者だったらどうする？ お前の立場を考えれば、容易に他人を信じるわけにはいくまい。俺が言っているのは国外からの侵入者だけが間者では無いつてことだ。むしろお前は国内に敵が多いだろうに」

目を細めるイーガンは、獲物を狙う肉食獣のようで不気味だ。だが、一応こちらを案じているのだろうとアーケルフは思った。

しかし、ユーリのこととなると、イーガンが示唆した通りに不明な点が多く疑わしいにも関わらず、何故か守りたいという保護欲がききたてられてしまう。

「お前の言いたいこともわかるが……、ユーリは善良な少女だ。魔力が無ければ本当に無害な存在だ」

「確かに性質は善良そうだが、あの娘は警戒心が強く油断ならないところがある。それに、あの娘の魔力は強大だ。まだ俺に全てを見せたわけでは無いだろうがな……」

アーケルフはユーリが生み出した水竜のことをイーガンには話していなかった。にも関わらず、イーガンはユーリの魔力の強大さを肌で感じているらしい。

「お前達魔法士は……他人の魔力の大小を見ただけで判断することができるのか？」

「人によるだろうが、俺にも多少わかる。一番良くわかるのは魔力で戦う相手と対峙する時だな。俺は基本的に他人のことはどうでも良いのでこの程度だが、メリンダは見ただけで大体わかると言っていたな」

イーガンの口からその妹の名が飛び出したので、アーケルフは背筋の凍る思いをした。

イーガンには双子の妹がいる。彼女の名はメリンダ。イーガンには及ばないながらも、彼女自身相当な魔力の持ち主であり、長じてからは筋金入りの男性嫌いで有名でもあった。

メリンダもまた、アーケルフの幼馴染にして従姉であり、イーガン以上に苦手な存在である。幼少の頃は、メリンダが「実験」と称する拷問からクレッドウインと二人でよく逃げ回ったものだった……。

「そうか。……それで、ひずみの件は進展はあったのか？」

アーケルフはそれとなく話題を変えた。

「無い。今のところはな……。そもそも魔力のひずみ自体文献を漁らねば確認できないほど滅多に無い事象だが、今回コウイスタ周辺で起こったひずみは過去に例を見ないからな」

「一時的にのみ使えなくなるはずの魔力が、いつまで経っても回復しない……か」

「ああ。過去の文献には、魔力が使えなくなるのは一時的なもので、ひずみから離れれば回復するとあった」

「しかし、実際三ヶ月前に起きたひずみの被害者は、魔力を失ったままだ」

「そうだ。この先も魔力が回復しないとすれば、これは重大な問題だ。この国の魔力持ちの数が減る。ひずみは今は無くなったように見えても、またいつどこに現れるかわからない」

優秀な魔力持ちの人数は国の防衛に影響する。魔法局、魔法学院に所属する魔法士や見習いの生徒達、軍に所属する魔法剣士等は、戦時になると国を背負って戦うことが義務付けられている。他国も大方同じだ。魔法士一人で一般的には敵兵十数人を相手にすることができる。魔法士や魔法剣士は戦時中における十分な戦力であり、その数が減るとなると、それはそのままその国の軍事力の低下を意味する。

「リグゼンディスタ国内でのみ起こっているのか？」

「それも今のところ不明だ。少なくとも周辺諸国では起こっていない」

「そうか……」

「それとお前達を襲った刺客のことだが……」

イーガンも話を覚えてきたので、アークルフは興味深げに聞く姿勢をとった。

「局の魔法士を派遣したところ、魔力の残骸を感じたそうだ。そこで大きな水属性の魔力が使われた可能性があると報告されたが、心当たりは無いか？」

アークルフは内心ひやりとしたが、そ知らぬふりを装った。

「いや、知らない」

「本当か、アークルフ？ 俺はてっきりユーリの仕業なんじゃないかと思っただが……」

「何のことだ？」

「お前は左肩に火傷を負っていた。それが刺客からの攻撃だとしたら、そいつは火属性の持ち主だったんだろう。では、水の魔力は誰が使った？ 言っておくが、水属性の魔法も刺客のものだということとは通じんぞ。春夏生まれが火と水の属性を持つとはいえ、一時に複数の属性の魔法を使えるものはそうはいない。いたしたら天才の部類だ」

アークルフは先日イーガンに治癒してもらった左肩を押さえた。今はすっかり癒え、火傷の痕も残っていないが、受けた衝撃は忘れられるものではない。

イーガンは一時に複数の属性の魔法を使えるものはそうそういないと言っているが、では、雷を落とした後に水竜を生み出したユーリは一体どれほどの魔力の才を持っているというのか……。

「……………」

「何も言わないつもりか？」

「ああ。今のところは……………」

イーガンは未だユーリを疑っている。それも至極当然のことだが、アークルフとしては今のユーリの立場を危ういものにはしたくなかった。

「ふん、まあいい。お前に頑固なところがあるのは知っているからな。だが、必ず何があったのかは説明させるぞ。……………それから、ユーリのことだが……………」

「何だ？」

「一度習得した言語ならば呼び戻すことも可能だろうと考えて、試してみたが……………あの娘は大陸の共通語を習得した経験は無かった。つまり、大陸の外から来たと考えていい」

確かにイーガンはユーリが単に言葉を忘れていただけなのか魔力を使って確かめると言っていた。その結果、ユーリはこの大陸の共通語を全く知らなかったという。

「……………そうか、良かった」

「どつという意味だ？　ますます正体不明になったじゃないか」

「少なくともユーリはこの国の、王妃やその配下の放った刺客では無いということだろう？　それに諸外国が放った間者でも無いはずだ。リグゼンディスタは大陸外の国と国交は無いわけだから……」

「まったく、お前はあの娘を良い方に考えすぎる。確かに性格も善良でなかなか使える娘だが、不明な点が多すぎるというのに……」

イーガンはひとつため息をついた。イーガンはアークルフのことを昔から弟分だと思つて可愛がつてきたつもりだ。それ故に、彼の頑固な性分もよく理解している。

それにしても、最近のアークルフは人が変わったように、突然現れたという記憶の無い少女に夢中だ。傍から見ていると心配になるほどに……。

「使えるとは？」

アークルフが尋ねてきたので、イーガンはしれつと言つてのけた。

「掃除の才能がある。文字の読み書きも覚束ないというわりに、書類の分類に長けている。どうやって仕分けているのか聞いてみたら、文書の標題に記載されている文字の形を覚えたそうだ。それと文書の形式もな。なかなか頭の回転が良い娘だ」

「お前、ユーリをこき使いすぎだ。……やはり魔法局に預けるのでは無かった」

アークルフは不愉快そうに顔をしかめた。

それに、イーガンはニヤリと笑ってみせる。

「例えばユーリの記憶が戻って、害の無い少女だとわかったとしても、未だお前の側に置いてはおけないだろう。この国の王位継承権の最高順位をしかるべき者に譲るまでは……」

「……ああ、そうだな。この問題にユーリを巻き込みたくは無いな」
「俺としては、このままお前が王位を継いだ方が良いのではないかと考えるがな」

「ごめんこうむる。俺には過ぎた権利だ」

アークルフはため息をついて、目頭を揉んだ。

この十年というものの、刺客に狙われる日々が続いている。アークルフを亡き者にしなければ、王妃が産んだ王子が次の王位につけないため、王妃勢はやつきになってアークルフを狙う。

国の中枢にいる者たちもアークルフの存在をどう扱うか決めかねている節があり、望んで軍に属した後も配置換えや急な出世が多く、目まぐるしい日々が続いていた。

先日までの休暇も、王都警備の騎士団長から王国軍の將軍位に異動になるにあたり、手続きに時間がかかると言われて無理やりに取りされたものだった。

兄に頼まれ承諾したとはいえ、アークルフにとって国の世継ぎであり続けることは過酷なことだ。

「もう少しだ。もう少しで王妃の不貞の証拠が掴める。それさえできれば、兄上もご自分の御子を正式な世継ぎに据えられるだろう」

「ああ、そうだな。王家の血を継がない者を次代の王に据えるとい

うのは業腹なものな」

イーガンが面白そうに笑うので、アーケルフは苦笑を返した。

結局のところ、この十年の間腐らずにやって来られたのは、イーガンやクレッドウィンという友が側にいてくれたからかもしれない。

「とにかくユーリはしばらく預かるぞ。魔法局にいてもらった方がお互いのためだからな」

イーガンにそう言われ、アーケルフはまた一つため息をついたのだった。

【10話】 王位継承権（後書き）

申し訳ありませんが、しばらく週一の更新になりそうです……。
気長にお付き合ひ頂けると嬉しいです。よろしくお願ひします。

【11話】 告白

生成り色の紙面を広げて、ユーリは書き取りをしていた。

コウイスタ村のロツコやマーナに手紙を書きたかったユーリは、アークルフに「こういうことを手紙に書きたい」と口頭で伝えて、手本を書いてもらったのだ。今、ユーリはその手本をせっせと書き写している。ややミミズが這ったような文字になっているのはご愛嬌だ。

魔法局に来てからというもの、ユーリはこの客室で午前中を過ごすことが多かった。

イーガンの研究室から近いこの部屋は、奥まった位置にあるせいか、住民課付近のにぎやかな気配も失せ、静かで日当たりの良い場所だった。

ユーリはここでアークルフからは読み書きを、イーガンからは魔法の基礎を習っていた。

基本的にはアークルフから読み書きを習っている時間が多いのだが、時折仕事の合間をみてイーガンがふらりと現れる。その場合は魔法学習の時間が変わる。急に横入りしてきたイーガンに不満も言わず、アークルフは同じ部屋でユーリが魔法を学ぶ様子を見守ることが常だった。

どうやら今日はイーガンが訪れる気配は無い。

先ほどアークルフが「王宮に呼ばれたようだ」と言っていたので、もしかしたら一日不在かもしれない。

書き取りが一段落すると、ユーリは窓の外を眺めていたアークルフに目をとめた。

「どうした、ユーリ？ 終わったのか？」

視線を感じたアークルフがユーリに振り返り、にこりと笑った。

「あ、はい。終わりました……。ちょっと汚い字になったけど……
マーナは僕の字、読めるから、大丈夫」

「どれ、見せてごらん」

手を差し出したアークルフから逃げるように、ユーリは書き上げた手紙を背に隠した。

「だ、だめ！」

「どうした、ユーリ。恥ずかしがる必要は無いだろう、俺は内容も知ってるんだし」

ユーリが口頭で内容を伝え、アークルフがそれを文字におこして手本を作ったのだ。彼は手紙の内容を知っている。けれど、ユーリとしては自分の下手な書き文字をアークルフに見られるのは嫌だった。

「でも、でも……僕の字、汚いです。……だから、アーク、読めな
いと思う」

「ユーリ、誰だって習い始めは上手くないさ。それに、君に読み書きを教えている立場としては、きちんと書き写せたか確認したいな。間違えて覚えている字があったらまずいだろう？」

そう言われて、ユーリはしぶしぶと手紙をアークルフに手渡した。

「ありがとう、ユーリ」

手紙を受け取ると、アークルフは文面に目を通していく。ユーリは恥ずかしくて自分の顔が赤くなっていくのを感じた。

「よく書けているよ、ユーリ。この文字だけ少しわかりにくいかな。少し練習してごらん？」

アークルフがユーリの背後に回りこみ、手紙を広げて一つの文字を指差した。

「は、はい……」

背後に男の体温を感じて、思わずユーリは体をこわばらせた。

ライラがあんなこと言うから、変に意識しちゃうよ……。

毎夜ユーリの元を訪れる長毛種の猫は、昨晚ユーリの枕元で、いかに男が危険な存在かということを滔々と述べ続けた。おかげでユーリは少し寝不足なのだ。

指摘された文字を別の用紙に書き写しすと、

「ああ、そうか。書き順を間違えて覚えてしまったんだな。この文字はこう書くんだ」

ぎこちなく体を固めるユーリの小さな右手を取り、アークルフは正しい書き順で書いてみせた。

「はい」

今、ユーリはアークルフの体に背中からすっぽりと覆われるような形で文字を習っている。

初めて会った時のアークルフは見事な白銀の甲冑を身にまとっていたが、魔法局に通うようになってからは平服を着るようになっていた。背もたれの無い椅子に腰掛けたユーリは、男のがつしりとした胸板を背中に感じて、恥じらい、居心地の悪い思いをした。

緊張しているユーリを知ってか知らずか、覚えなおした書き順通りに書いたユーリを褒めるように、アークルフは少女の頭の天辺にキスをした。

「あってるよ、ユーリ。これで少しは書きやすくなっただろう？」

「は、はい……」

は、恥ずかしいよう……。

ぎゅっと目をつぶって何度も頷くユーリの頭を撫でると、アークルフはユーリから離れた。ユーリは少しほっとして肩の力を抜いた。しかし、しばらくアークルフが無言でいたので、ユーリは少し怪訝に思っただけ振り返った。

「ユーリ……」

「はい？」

いつになく真剣なまなざしのアークルフがいた。

不思議に思っただけユーリは小首をかしげる。一体どうしたというのだろう。

アークルーフの青い瞳の奥に自分が写っているのが見えた。長いこと見つめられて、ユーリはまた少し照れくさくなる。

「ユーリ、俺は……」

大きな手の平に左頬を包まれた。

ユーリは一瞬目をつぶり、すぐに開いた。

視界に、思いつめたような表情のアークルーフが飛び込んでくる。

時間が止まったかと思われ、錯覚するほど、

「ユーリ……」

長いこと見つめられて、無意識にユーリは体の力を抜いた。

少し潤んだ美しい青の瞳に魅せられる。

頬に感じる熱が心地よい。

この手は怖くない。

目を閉じて、自分の左頬を包む男の手に小さな手を重ねると、今度は男の頬がギクリと体をこわばらせたようだった。

「ユーリ、俺は君が大切だ……自分でも驚くほど……。その……」

最後の方の言葉を、唇の上で吐息と共に感じ、ユーリはゆっくと瞳を開いた。

不思議なことに、あれほど感じていた羞恥心が麻痺していく。

「ユーリ、その……キスしても？」

今さらのように尋ねてきた男に、ユーリの方がじれったくなくて、請求するように目を閉じた。

すると、唇に熱く湿った息がかかり、ためらうように一瞬離れたかと思うと、次の瞬間熱く柔らかな感触になってユーリの上に重なった。

一度ためらいをみせたことが嘘のように、大きな手がユーリの後頭部を支え、きつく抱きしめてきた。熱い唇は何度も角度を変えて、ユーリのそれと重ねられていく。

熱い。

熱に浮かされて、すぐるように男の胸に手をすがらせていたユーリは、ふと一瞬だけ正気に戻った。

あ！ ライラにお守りもらったけど、大丈夫かな？

先日猫のライラに男よけ（？）のお守りをもらったユーリは、少しだけ心配になった。

しかし今さら止めてもらおうにも、アークルフの方はすっかり盛り上がっていて、放してくれそうに無い。

それに、私も嫌じゃない……。

抱き寄せられて唇を重ねる心地よさに、ユーリはライラのことをしばし忘れた。

結局のところ、年頃の少女らしく、ユーリも女友達の忠告よりも目先の幸せを優先したのだ。

猫が渡したお守りは、感極まったアークルフの抱擁に最後まで発動することは無かった。

何度も重ね合わせられた唇を離し、熱を冷ましあうように今度は額を重ね合わせた二人は、至近距離で視線を合わせて、はにかみ笑った。

ユーリは照れくさかったが、それよりもアークルフに子ども扱いされずに求められたことが嬉しかった。

後にアークルフに「二人でいて平常心でいられることの方が少なかった」と言われて、少々誇らしくなった程だ。

「アークは……僕のこと、好き？」

この時ばかりは視線を外してユーリが尋ねると、

「ああ。ものすごく。自分でも驚くぐらいに」

アークルフが断言したので、ユーリははにかんで、今度はアークルフの肩にこてんと額を寄せた。すると、やんわりと抱きしめられたので、また少し微笑む。

好かれるのは嬉しい。安心する。そこに自分の居場所を感じる。

ロツコやマーナとは違う親しみをアークルフに感じ、あれだけどきまぎとしていたのに、今は落ち着きさえ感じていた。羞恥心よりも、誰かに受け入れられたという安心感の方が強いのもしれなかった。

アークルフがユーリを想うのと同じように、思い返せているのはわからない。同じような情熱が自分にあるのかも知らない。けれど、求められて感じる嬉しさは確実にユーリに自信を与えてくれた。記憶を無くし、行く宛ても無かったユーリにとって頼りになる者は少なく、いつだって不安だった。地に足をつけてしっかりと立っている感覚が希薄だったといってもいい。

けれど今、ユーリは記憶を無くしてから今まで感じることのなかった充足感を得ていた。

「僕も……アークが……好き」

言葉に出して言ってみると、ストーンと自身の胸の内に「好き」という感情が落ちてきた。

そうだ、私はアークが好き。

照れながらもアークルフを見上げると、嬉しそうに微笑んでいた。ユーリも照れ笑いを返す。
アークルフの目が伏せられ、また唇が近づいてきたので、ユーリもまた目を閉じた。

そこへ、

コンコン

ノックがして、

「おーす！ 勉強頑張ってるか、ユーリちゃん？」

陽気なクレッドウィンが現れて、固まる二人に得意げなウインクを見せて見せた。

【11話】 告白（後書き）

ちよつと性急だったかな……（；^ー^）。でも、早いうちに両思いになるのは決めていたことでした。

アークルフはヘタレでユーリはちよつと早熟さん、かな……。

クレッドウインがいいタイミングで押しかけてくるのは、この小説のお決まりのパターンです（笑）。

【12話】 昼食の誘い

「一体何の用だ、クレッド？ ……邪魔ばかりしやがって」

最後の方は小さく口の中で言ったつもりのアークルフだったが、

「悪い、悪い。わざとじゃねーんだよ？ でも、俺って奇跡の瞬間に現れる男だからさー。その辺は勘弁してくれよ！」

しっかりと聞き取られていたらしく、軽く返された。

ユーリはといえば、口付けされる寸前のところを目撃されて恥ずかしがってしまい、顔を伏せたままアークルフの背中に隠れている。

「だから用件は何だ？」

「おっと、そうだった！ さっき王宮でイーガンに会ったんだけどよ、今日は一日中王宮に詰めるらしいんだよ。お前はお前で午後から王宮に戻るだろ？ もしかしたらユーリちゃんが暇になるんじゃないかなーと思って、お誘いに来たんだよ」

「お誘い？」

ピクリとアークルフの片眉が上がる。

それを面白そうに見ながらクレッドウインは続けた。

「そんな怖え顔すんなよ、アークルフ。お誘いしてるのは俺だけじゃないんだぜ。今日は祝日の前日で午後から休みのやつが多いだろ？ そこにいるお姉ちゃんもユーリちゃんと一緒に昼飯食べたいっ

て言っからさ」

“そこ”とクレッドウィンが指した先、扉の影に、顔を赤くしたデリアがいた。

「あ！ あの、いえ、私……な、何も聞いてませんっ！！」

以前にユーリが『魔力保持申請』を提出した際に対応した、窓口の赤毛のお姉さんこと、デリアは慌てふためいて取り乱している。

ユーリはアークルフの影からデリアを見つけて、目をぱちくりさせた。

「デリアさん」

「知り合いか？」

アークルフが尋ねてきたので、ユーリは頷いた。

「住民課の窓口のお姉さんです。とても親切な人……」

ユーリの言葉を受けて、アークルフは人物を確認するようにデリアを見た。

赤毛を後ろできちんとまとめた黒ぶちメガネの女はなかなかの美人だが、アークルフの記憶には無かった。少なくともイーガンの秘書や助手を経験したことは無さそうだ。

「それで、何故住民課の窓口係がこんなところにいるんだ？ クレッドウィン、知り合いか？」

「いや、今さっきその廊下で会ったんだ。こんな美人、前から知

っていたらとつくの昔に食事にお誘いしてるところだぜ。なあ？」

クレッドワインに「なあ？」と声をかけられたデリアは、体を小さくして「すいません、すいません」と侘びの言葉を連呼している。

「今日は早く仕事が終わったんで、ユーリちゃんとお前の顔を見に来たんだが、扉の前でこの娘が固まっていたからさ。一緒になって扉の向こうの気配を伺ってたんだよ。結構緊張したよな、なあ？」

「またもやクレッドワインに同意を求められ、デリアは更に小さくなった。」

「お前達、立ち聞きしてたのか？」

ずっとアークルフの目が細められ、声も低くなる。

途端にデリアはビクリと体を震わせ、クレッドワインは面白そうにニヤリと笑った。

「いや、俺は途中からだけど……。デリアちゃん、だっけ？ は、いつからいたのかわかんねえ」

ニッコリとクレッドワインが笑う。

アークルフはそれを聞いて不愉快そうに顔をしかめた。

「あ、あのー！」

そこにユーリが割って入った。

「デリアさん、僕にとっても親切でした。たぶん、お昼ご飯一緒に食べようって誘いに来てくれたんです！」

「そうそう、ところ構わず盛るお前が悪い。何より、いくら魔法局がイーガンの結界の中だからって、扉越しの人の気配に気づかないなんてお前らしくねーだろ。……どんだけ興奮してたんだって話だよな」

自身を擁護する二人（？）の言葉に背中を押されたデリアは、急いでまくし立てた。

「で、殿下！ 申し訳ありません！！ あの、立ち聞きするつもりは無かったです！ ただ、驚いて足が動かなくなってしまうって……。も、申し訳ありませんでした！」

深々と頭を下げるデリアを見て、ユーリも焦った。

「ア、アーク！ お願い、怒らないで。デリアさん、僕の友達……」

両手を顔の前で組み合わせて小首をかしげるユーリの必死な様子に、アークルフが少し固まる。

「よし、ユーリちゃん。もっと言ってやれ！」

「お願い、アーク！」

背中にクレッドウィンの声援を感じつつ、ユーリがもう一度懇願する。

「しかし、ユーリ……」

「お願い……」

三度目の“お願い”に、アークルフはついに折れた。

決して“潤んだユーリの目があまりにも可愛かったから仕方が無く……いやいや、そんな理由ではないぞ！”などと思いつながら。

「ごほん。わかった。……デリアといったか。以後気をつけるように。これが局長との会談等を立ち聞きしたのであったら、お前は解雇されているところだ。慎めよ。それと……他言はするな。噂等になつた場合には、私はお前を処断しなければならぬ」

「はい！ ありがとうございます、殿下！ 決して他言致しません。以後重々気をつけます！」

デリアは顔を上げ嬉しそうに言うと、再度深々と頭を下げた。

「アーク……って、なんだかちょっと、いばりんぼ……」

ユーリがぼつりと呟き、アークルフは再び体を硬くする。

「いやいや、いばりんぼはアークの仕事の内なんだよ、ユーリちゃん。慣れてやんな」

フォローになつてないフォローをクレッドウィンが言い、ユーリは不思議そうな顔をした。

「いばりんぼがお仕事ですか？」

「そうそう。ほら、ユーリちゃんはデリアちゃんと一緒に先に出てな。俺はアークルフと話があるからさ。住民課の窓口のところで待ち合わせでどうだい？」

「待ち合わせ？」

「侯爵閣下も一緒に!？」

ユーリとデリアが同時に言い、互いに顔を見合わせた。

「えと、どうじゃく……?」

戸惑うユーリにクレッドウィンが笑って言う。

「デリアちゃん、クレッドでいいよ。堅苦しい呼び名はよしてくれ」

「は、はい。クレッド様」

「本当は様もいらないんだけどなあ……」

がりがりと頭をかきつつクレッドウィンが言うのだが、デリアはこればかりは譲れないと何度も頭を振った。クレッドウィンも「仕様が無えか」とあきらめたようだ。

そこに、

「クレッド……魔法局の外へ出かけるつもりか？」

心配そうにアークルフが割って入った。クレッドウィンは肩をすくめてみせる。

「大丈夫だって! ユーリちゃん、この一週間外に出てないんだぜ。ずっと魔法局のしかも同じ建物の中を行ったり来たりだ。これじ

や息が詰まっちゃまう」

「アーク、僕も外へ行ってみたい」

クレッドウインの言葉にかぶせるように、ユーリが嬉しそうに言うので、アークルフも仕方が無くため息をついた。

小首をかしげて懇願するユーリも可愛らしいが、嬉しそうに頬を紅潮させて微笑むユーリは更に可愛らしい。

アークルフはユーリの両肩を掴み、心配そうな様子を隠そうともせず、ゆっくりと話した。

「わかった。外に出ることは許可しよう……。ユーリ、絶対にクレッドの側を離れるんじゃないぞ。はぐれたら、前に俺が着ていた甲冑を身に付けた騎士を見つけて、俺の名前を出して保護してもらうこと。いいね？」

「はい、アーク」

アークルフはそれでもユーリの肩から手を離そうとしない。

「お前も過保護だねえ。王都騎士団を使ってユーリちゃんを警護するつもりかよ？」

「ああ、そつだ。お前から一声かけて周知してくれ、新団長殿」

「はいはい、一応心がけますよ」

先日の配置換えで、王都騎士団の団長だったアークルフは王国軍に戻り、後任にはクレッドウインが就任した。つまり、王都の警護

を主な仕事とする王都騎士団はアークルフの古巣であった。

その組織を使つてでもユーリから目を離すな、というアークルフの命に、クレッドウィンは従うことにした。

「じゃあ、ユーリ。気をつけて」

「はい。行ってきます、アーク」

アークルフと話があるから、というクレッドウィンを残してユーリはデリアと共に部屋を後にした。ユーリはその手に、書き上げたばかりの手紙を大事そうに持っている。

デリアが郵送手続きをしてくれるというので、二人は先に住民課に向かったのだった。

「それで？ 話とは何だ？」

二人の足音が遠ざかったのを確認し、切り出したアークルフにクレッドウィンはいつになく真剣な面持ちで語った。

「話というより報告だ。……先日、お前に命じられて調べた結果だが、……コウイスタ村付近で追剥をしていた複数の集団を検挙した。一人残らず王都に引つ立ててきたぜ」

「そうか。……三ヶ月前に魔法具を失くした追剥を見つけたら教えて。俺が自ら処断する」

「おいおい、裁きに私情は禁物だろ。それに、感情にまかせて裁い

た後で、後悔するのはお前だぜ。きつと“あの時の俺は公平では無かった”とかなんとか言つて悔やむくせに」

「しかし……、コウイスタ村で発見された当時のユーリはひどい姿だつと聞く。年端もいかない少女を暴行するなど、これがユーリでなくとも許せることではない」

アーケルフは怒りで拳を震わせた。

発見された当初のユーリの惨状をコウイスタ村の村長夫婦から聞いて、知識として知っていた。治安が悪いのならば対処せねば、と感じてもいた。だが、それはユーリに実際会うまでの話だ。ユーリと出会い、愛しく思うにつれて、少女を痛めつけた存在をそのまま放置しておくことに我慢がなくなつた。

復讐では生ぬるい。自ら裁き、ユーリが味わつた苦しみの何倍も惨めで辛い思いをさせてやるう、そう思いクレッドウィンに搜索させていたのだが……。

「お前はやめとけ。俺が代行する。だからといって、俺が優しくな
いことは知ってるだろ？ そうだな、もしもこの先俺がお前と同じ
ような立場に立つて、とち狂いそうになつたとしたら、お前が代わ
りに対処してくれ。これでどうだ？」

「……わかつた」

クレッドウィンの思いやりを感じ、アーケルフはしぶしぶ頷いた。

「しかし、お前も性急な奴だよな。こんなに早くあの子をモノ
にしちまうとは思つてなかつたぜ。大体、あの子いくつなんだ？」

「うるさい。……年齢は覚えてないそうだ」

「これでお前……記憶を取り戻した後に、十三歳とか言われたらどうするつもりだ？」

「……十五になるまで我慢する」

「ぶはっ!!」

この国の成人年齢は十五歳だ。十五歳未満の者は子供とみなされる。子供と関係を持つとする行為は虐待であり、犯罪でもある。そのため、年端のいかない少女の時に結婚が決まったとしても、実際の輿入れは十五を過ぎてから行なうのが一般的だ。

クレッドウインは腹を抱えて笑った。最近のアーケルフは面白い。
きる。

「いや、俺も十五にはなってると思うけどよ……ぶふふっ!! 実際わかるまではお前が我慢してもんもんとするのかと思うと、可笑しくて堪らねえ！」

「笑いすぎだ、クレッド。黙れ」

「いや、無理だつて。ぶはっ!!」

いつまでも笑いこぼる友人に苛立ちを覚え、アーケルフは、ついにその膝下に蹴りを入れたのだった。

「ねえ、ユーリ。ユーリは殿下の恋人なの？」

ユーリにだけ聞こえるように、デリアが耳元でこそこそと質問してきた。

「殿下ってアークのことですか？」

「きゃー！！ 愛称で呼んでるの？ それは二人の間だけで使われる愛称なの？ そうなの？ きつとそうなのよね！ 素敵！！」

耳元で叫ばれ、ユーリは驚いて飛びのいた。

「えと、デリアさん、もう少しゆっくり話してください」

「あ、ごめんなさいね。つい早口になっちゃって」

住民課のカウンターで、ユーリとデリアはユーリの手紙を便箋に入れ、封をしたところだった。

いつもはカウンターの向こう側にいるデリアが、今回はユーリと一緒に申請者側にいるのが何だか新鮮だ。

午後の住民課は人通りも少なく職員もまばらだ。

聞けば、明日は祝日らしく、住民も職員も午後から休みを取っている者が多いらしい。

「それでそれで？ ユーリはいつから殿下とお知り合いなの？」

再度デリアが耳元でユーリに尋ねてくる。
ユーリは照れながらも、正直に答えた。

「えっと……アークと初めて会ったのは十日くらい前です」

「まあ！ 出会いはつい最近のことだったのね！ で、電撃だわ。
素敵！」

耳が痛い。デリアは小声で話そうと努め、周りの気配にも気を巡らせているようだ。如何せん興奮した時の声が大きすぎる。その度に数は少ないながらもこちらに注目する視線を感じ、ユーリは少しうろたえた。

「デ、デリアさん。住所書いてくれましたか？」

ユーリの代わりに宛先を書いてくれていたデリアの手元を見ると、しゃべりながらも仕事はしてくれていたらしく、綺麗な文字でコウイスタ村の住所が記載されていた。

「はい、できたわよ！ 後はこれを郵便用の箱に入れておくれだけ。

「二、三日で届くと思うわ」

「ありがとうございます。デリアさん」

デリアは住民課専用の郵便箱に便箋を入れてくれた。郵便費用は他の郵便物と一緒に魔法局が出してくれるらしい。

「私、ずっと……殿下にはイーガン様だ、って思ってたの！ 禁断の主従愛！ 俺様攻め！ 下克上！ 常に妄想で楽しませてもらっ

てたの……でも、ユーリちゃんが相手でも全然いい！ むしろ萌え！
ヘタレ攻めに、僕っ子……素敵！！」

デリアが何を言っているのか半分以上理解できずに、ユーリは困惑した。“殿下”やら“イーガン”等の名前が出てくるところは小声にしつつも、その他の言葉は魂の叫びのようだ。内容は理解できないが、デリアが興奮している様子は伝わってくる。

「あの、デリアさん……？」

なかなかこちら側に戻ってこようとせず、目を閉じ両手を顔の前で組んだまま陶醉しているデリアに、ユーリは恐る恐る声をかけた。住民課の同僚に“残念な美人”とデリアが称されていることなど知る由も無い。今も“また始まったか”と意に介さない職員達は、今回ばかりは視線も寄こさず、淡々と仕事をしている。

「よお、お嬢ちゃん達。待ったかい？」

そこに丁度良くクレッドウィンが現れ、デリアはやっと妄想の世界から帰ってきた。

「ま、まあ。システイクレイド侯爵閣下」

「だから、それはやめてくれって」

「す、すみません！ クレッド様」

「そうそう。で？ ユーリちゃん郵便手続きはできたのか？ できたならそろそろ昼飯食いに街へ出ようぜ」

デリアの様子に面食らっていたユーリだったが、クレッドウィンが彼女を引き戻してくれたので、心底ほっとした。何しろ何を話しているのか、どう話し返せばいいのか、見当もつかなかったのだ。

「あ、はい。僕の用事は終わりました。街に行く、楽しみです」

いつもの様子に戻ったデリアとクレッドウィンに連れられて、ユーリはこの日初めて、王都の街並みを目にすべく街へくり出した。

【12話】 昼食の誘い（後書き）

デリアさんは雑食です。BLもGLもいけるようです。もちろんノーマルもお好きなようです。

この小説の中でBL的表現が出るのは、デリアさんの脳内妄想の中だけです。苦手な方はどうぞ安心して読み進めてください。

とはいっても、デリアさんの発言自体が苦手な方もいらっしゃるかもしれませんよ、きつと……。こういった発言は頻繁に出るものではありません。デリアさんにも恥じらいがありますので……。申し訳ありませんが、ご了承ください。

ちなみに現在のデリアさんの萌え対象は「アークルフとユーリ」の組合せです。イーガンは単体で（萌え対象として）お好きなようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7291p/>

王弟殿下の想い人

2011年1月17日11時55分発行